茨木市文化財資料集　第66集

平成27年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報8

－国庫補助事業に伴う発掘調査－

平成28年（2016年）3月

茨木市教育委員会

茨木市文化財資料集　第66集

平成27年度

茨木市埋蔵文化財発掘調査概報8

－国庫補助事業に伴う発掘調査－

平成28年（2016年）3月

茨木市教育委員会

序　　文

私たちの住む茨木は、北半部は老の坂山地の麓で、南半部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境のもと、多くの人たちが生活を営んできました。その先人たちの足跡の多くが埋蔵文化財として私たちが生活する地面の下に残されています。

先人たちの生活や文化は、現代の私たちの生活の基となるものです。遺構や土器などの埋蔵文化財は、現代の私たちにとって、先人たちが積み重ねてきた歴史をひも解く手がかりとなるかけがえのない財産です。

しかし、本市は、近年の大規模な開発により宅地化が進み、土地利用の形態が変化したことで、これまで残ってきた多くの埋蔵文化財を現状のまま残すことが困難になってきました。そのため、発掘調査によって埋蔵文化財を記録保存することにより、かつてこの地に刻まれた歴史や文化を次世代に残し伝えていくことが、今を生きる私たちの重要な使命であると考えます。

本書は、平成 27 年度に実施した個人住宅建設工事に伴う発掘調査、耳原古墳及び千提寺菱ヶ谷遺跡の範囲確認調査の概要報告書です。これら一つ一つ積み重ねた調査成果が、郷土茨木の歴史遺産として広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりまして、土地所有者、施工関係者、近隣の住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月 31 日

茨木市教育委員会

教育長　河井　豊

例　　言

1．本書は、平成27年度国宝重要文化財等保存整備費市内遺跡発掘調査等事業（総額13,223,265円の内、国庫6,611,000円、市費6,612,265円）として実施した、個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査及び、耳原古墳、千提寺菱ヶ谷遺跡の範囲確認調査の概要報告書である。平成27年度として、平成27年4月1日から平成28年3月31日までの期間で発掘調査及び整理作業を実施した。ただし本書では、整理作業の都合から平成27年1月から同年12月末までに調査を終了したものを対象に報告する。

2．調査の実施は、本市教育委員会社会教育振興課文化財係発掘調査員、川村和子、木村健明、齊藤大輔、坂田典彦、髙村勇士、富田卓見、藤田徹也、正岡大実、水久保祥子があたり、大坪啓子、川西宏美、川畑康雄、中川夕香、宮西貴史がこれを補助した。

3．本書の執筆は各調査担当者がおこない、髙村が編集にあたった。ただし、第３章第２節「３．遺物」については、川村、富田が執筆した。

4．第３章第４節末尾に掲載した「自然科学分析結果の概要」は、パリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託したものである。

凡　　例

1．本書で使用する標高はT.P.（東京湾標準海水面）で表記する。各挿図に掲載する表記の内、M.N.は磁北を示し、表記のないものは国土座標系〔第Ⅵ系〕に基づく座標北を示す。

2．挿図及び本文中の土色表記は、小山正忠、竹原秀雄　編著『新版標準土色帖』（2014年版）に基づく。

3．遺物、図面・写真等の記録は茨木市立文化財資料館〔〒567-0861大阪府茨木市東奈良三丁目12番18号　TEL072-634-3433〕にて保管している。広く活用されることを希望する。

本文目次

序　　文
例　　言
凡　　例
第１章　地理・歴史的環境…… 1
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1
第２章　平成27年度発掘調査一覧 …… 3
第３章　調査の成果…… 5
　第１節　茨木遺跡…… 5
　第２節　倍賀遺跡、郡・倍賀遺跡…… 7
　第３節　耳原古墳…… 15
　第４節　千提寺菱ヶ谷遺跡…… 21
写 真 図 版
抄 録 ・ 奥 付

挿図目次

図１　茨木市周辺地形図…… 1
図２　平成27年度発掘調査地位置図 …… 4
図３　IBK15-1調査区位置図 …… 5
図４　IBK15-1周辺図 …… 5
図５　IBK15-1平・断面図 …… 6
図６　調査地周辺図…… 7
図７　調査区配置図…… 8
図８　HKA15-1～HKA15-6　平・断面図 …… 9
図９　HKA15-7～HKA15-10、KOR・HKA15-2　平・断面図 … 11
図10　各調査区　包含層出土土器実測図…… 13
図11　HKA15-1、HKA15-2、HKA15-8
　　SD1出土土器実測図 …… 13
図12　墳丘測量図・範囲確認トレンチ配置図…… 15
図13　トレンチ１・２　平・断面図 …… 17
図14　トレンチ３・４　平・断面図 …… 19
図15　出土遺物 …… 20
図16　トレンチ位置図・遺構配置図 …… 22
図17　範囲確認ルート１・２土層断面図 …… 23
図18　範囲確認ルート３土層断面図 …… 25
図19　範囲確認ルート４土層断面図 …… 26
図20　土坑墓（SK1）平・断面図…… 27
図21　大型土坑（SK2）平・断面図…… 29
図22　土坑４（SK4）・溝１（SD1）平・断面図 …… 30
図23　出土遺物実測図・遺物写真 …… 31
図24　頭蓋各部位の名称と出土部位概念図 …… 35
写真１　出土骨…… 36

写真図版目次

図版１　茨木遺跡
　１．調査区南壁断面
　２．調査区全景
図版２　倍賀遺跡　郡・倍賀遺跡
　１．調査地近景
　２．HKA15-6 機械掘削
　３．HKA15-6 調査区西壁断面
　４．HKA15-7 完掘状況
　５．HKA15-8 調査区西壁断面
　６．HKA15-8 完掘状況
　７．HKA15-9 完掘状況
　８．HKA15-10 完掘状況
図版３　倍賀遺跡　郡・倍賀遺跡
　１．HKA15-1、HKA15-2、
　　HKA15-8　SD １出土遺物
　２．包含層出土遺物
図版４　耳原古墳
　１．トレンチ１全景
　２．トレンチ１断面
　３．古墳羨道部断面
　４．トレンチ２全景
　５．トレンチ２断面
　６．トレンチ２断面
図版５　耳原古墳
　１．トレンチ２墳丘盛土断面
　２．トレンチ２墳丘盛土断面
　３．トレンチ２周溝断面
図版６　耳原古墳
　１．トレンチ３全景
　２．トレンチ３墳丘側断面
　３．トレンチ３西側断面
　４．トレンチ４全景
　５．墳丘盛土断面
　６．周溝断面
図版７　耳原古墳
　１．出土遺物（１）
　２．出土遺物（２）
図版８　千提寺菱ヶ谷遺跡　土壙墓（１）
　１．土壙墓から東方の竜王山を望む
　２．土壙墓検出状況
　３．セクション設定状況と石材出土状況
　４．土壙墓に投入された矢穴痕をもつ割石
　５．土壙墓分割掘削完了状況
図版９　千提寺菱ヶ谷遺跡　土壙墓（２）
　１．縦断面西半部堆積状況
　２．横断面北半部堆積状況
　３．頭骨・下顎骨出土状況
　４．頭骨検出状況
　５．土壙墓出土矢穴痕をもつ割石
図版10　千提寺菱ヶ谷遺跡　大型土坑
　１．最高所に立地する大型土坑
　２．大型土坑検出状況
　３．土層断面
　４．土層断面
　５．底面検出状況
　６．部分掘削完了状況
図版11　千提寺菱ヶ谷遺跡　テラス造成他
　１．南尾根テラス面検出状況
　２．南尾根テラス面検出状況
　３．南尾根南端部検出長方形土坑
　４．範囲確認ルート１
　５．範囲確認ルート２・３
　６．範囲確認ルート４
　７．現地見学会風景
　８．発掘調査検討会風景

第１章　地理・歴史的環境

第１節　地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、東は高槻市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町、南は摂津市、北は京都府亀岡市に接しており、南北17.05km、東西10.07kmと、南北にやや長い市域を有している。

茨木市域の地理的特徴は、北半部と南半西部、南半東部の三地域に大きく分けられる。北半部は、標高300ｍ前後の北摂山地及び、それから派生する丘陵が占める。南半西部は、標高50～100ｍ前後で洪積層からなる千里丘陵の裾が広がり、南半東部は、市域東部を南北に縦断する安威川、北摂山地より市域中心部に流れる茨木川などの河川によって形成された沖積層からなる平野が広がり、大阪平野の一部を構成する。

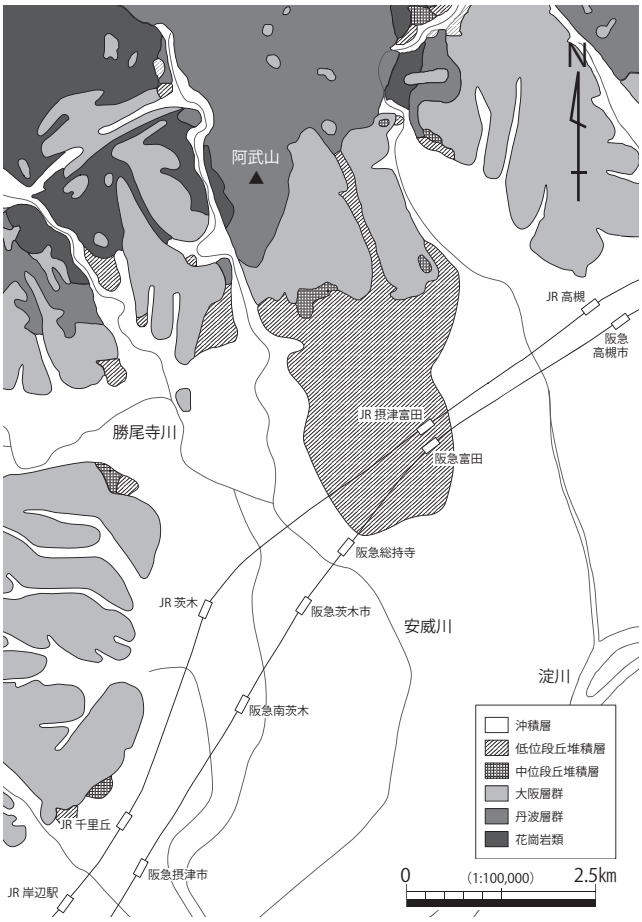


図１　茨木市周辺地形図（市原実編 1993『大阪層群』より作成）

第２節　歴史的環境

茨木市内で最も古い人類の痕跡は、山麓部の初田遺跡や丘陵部裾の太田遺跡、安威遺跡など、平野部に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡などで表面採集や後世の包含層内で検出された、旧石器時代後期のナイフ型石器や有舌尖頭器に認められる。

縄文時代後期から晩期になると、耳原遺跡において縄文晩期の深鉢棺墓群が検出され、総持寺遺跡においても甕棺墓と考えられる土器が出土している。牟礼遺跡では、縄文晩期から弥生前期の土器や水田跡、井堰等が検出されるなど、茨木市域に人々が根付いている様子が見られだす。

弥生時代前期には、東奈良遺跡、目垣遺跡、総持寺遺跡、溝咋遺跡、新庄遺跡に集落跡が見られる。前期末には、耳原遺跡や郡遺跡にも集落が形成され、中期及び後期には遺跡数がさらに増加し、倍賀遺跡、中条小学校遺跡など、河川の両岸や北部の丘陵、山地まで分布的広がりをみせる。特に前期から継続する東奈良遺跡は、幾重もの環濠をめぐらせており、国の重要文化財に指定されている石製銅鐸鋳型などが出土していることから、青銅器などの鋳造工房を持つ拠点的集落であると考えられている。

古墳時代になると、前期に北部の丘陵に佐保川を挟んで紫金山古墳、将軍山古墳という全長100ｍ前後の前方後円墳が相次いで築造され、中期には、「継体天皇三嶋藍野陵」に治定されている前方後円墳、太田茶臼山古墳が全長226mの規模で築造される。

古墳時代後期には、南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳などが築造される。耳原古墳は大

型の横穴式石室を持ち、玄室奥には蓋に計 6 個の縄掛突起を持つ家型組合式石棺、羨道近くには蓋に計 2 個の円形突起を作り出す家型刳貫式石棺といった形式の異なる 2 基が安置されている。また、新屋古墳群、安威古墳群、将軍山古墳群、長ヶ淵古墳群、桑原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が山裾部を中心に築造される。また、低位段丘から平野部においては、太田古墳群、総持寺古墳群、中条小学校遺跡、郡古墳群などのように、横穴式石室を持たない直葬の古墳群が見られる。

奈良時代になると、茨木市域は摂津国島下郡に編成される。平城遷都にともない、島下郡には「殖村駅」が置かれ、茨木市域は宮都から難波や山陽・西海道諸国への公的な通路となる。この通路は、近世の西国街道や現代の高速道路などにもつながり、茨木市の交通の要衝たる特徴は、古代以来脈々と受け継がれている。

また、舎利容器が遺存する太田廃寺や、藤原山蔭創建の総持寺、山林寺院である忍頂寺など多くの寺院が存在したことが知られる。さらに、『延喜式』には、島下郡に 13 社もの神社が見られ、これは『弘仁式』にまでさかのぼると考えられている。このように、多くの寺社が市内全域に亘って見られ、古代以来、信仰という側面も茨木市の歴史を考える上で非常に重要な視点である。

中世の遺跡としては、東奈良遺跡や中条小学校遺跡、舟木遺跡、新庄遺跡、玉櫛遺跡、郡遺跡などの集落遺跡が挙げられる。さらに、中世から近世初頭の遺跡には、茨木城、三宅城、福井城、泉原城、佐保砦などの城郭がある。現在の茨木市中心部には茨木城が築かれた。その城主は、茨木氏、中川氏、片桐氏と変遷し、その内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城や廃城後の近世在郷町の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも発掘調査によって得られる知見は、その解明に向けてとりわけ重要である。

また、市域北部の千提寺や下音羽には、東家の「あけずの櫃」より発見された「聖フランシスコ・ザビエル像」(神戸市立博物館蔵) をはじめ、キリシタン墓碑やメダイなど多くのキリシタン遺物が伝世している。これらの遺物は、キリシタンの文化が 16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて禁教令下の江戸時代を通じて秘かに受け継がれてきたことを示し、多くの注目を浴びている。本書所収の千提寺菱ヶ谷遺跡をはじめ、今後発掘調査によって得られる資料は、伝世資料を補間するだけでなく、その土地に根付いた文化や歴史の細部にまで光を照らす重要な鍵となるであろう。

参考文献

市原実編 1993『大阪層群』

茨木市教育委員会 1998『茨木の史跡』

茨木市教育委員会 2000『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』

中村博司編 2007『よみがえる茨木城』

茨木市 2012『新修　茨木市史　第一巻　通史Ⅰ』

第２章　平成27年度調査地一覧

No.	遺跡名［略号］	調査地	調査期間	面積	担当者	内容
1	中条小学校遺跡［CJS14-10］	奈良町	2015/1/20～21	12㎡	木村	溝2条を検出
2	玉櫛遺跡［TMK14-5］	玉櫛一丁目	2015/2/9	6㎡	木村	遺構・遺物なし
3	穂積廃寺跡［HZH14-1］	上穂積三丁目	2015/2/19～20	17.6㎡	木村	耕作土中から重弧文軒平瓦出土
4	五日市遺跡［ITK14-3］	上野町	2015/2/23～24	31㎡	富田	遺構・遺物なし
5	牟礼遺跡［MUR14-9］	園田町	2015/2/27	4㎡	齊藤	遺構・遺物なし
6	中条小学校遺跡［CJS14-12］	駅前一丁目	2015/3/6	4㎡	富田	遺構・遺物なし
7	穂積廃寺跡［HZH14-2］	見付山二丁目	2015/3/6	4㎡	富田	ピット2基検出
8	牟礼遺跡［MUR14-10］	園田町	2015/3/9	10.5㎡	木村	遺構・遺物なし
9	東奈良遺跡［HN14-12］	天王一丁目	2015/3/24	3㎡	富田	遺構・遺物なし
10	牟礼遺跡［MUR15-1］	中津町	2015/4/2	9㎡	坂田	遺構・遺物なし
11	茨木遺跡［IBK15-1］	大手町	2015/4/15	7㎡	水久保	本書所収
12	郡遺跡・三島街道［KOR・MSK15-1］	上穂積四丁目	2015/4/21	6㎡	水久保	遺構・遺物なし
13	東奈良遺跡［HN15-4］	東奈良二丁目	2015/4/28	9㎡	正岡	遺構・遺物なし
14	茨木遺跡［IBK15-2］	片桐町	2015/6/4	4㎡	髙村	遺構・遺物なし
15	五日市遺跡［ITK15-1］	五日市二丁目	2015/6/24	3㎡	富田	遺構・遺物なし
16	耳原古墳［MHK15-1］	耳原三丁目	2015/7/6～23	65㎡	正岡	本書所収（範囲確認調査）
17	上中条遺跡［KCJ15-1］	上中条一丁目	2015/7/7	6㎡	髙村	土坑1基・ピット1基・溝2条を検出
18	東奈良遺跡［HN15-8］	東奈良二丁目	2015/7/10	6㎡	髙村	包含層を確認、弥生土器出土
19	中条小学校遺跡［CJS15-6］	下中条町	2015/7/23	6㎡	正岡	溝状遺構1条を検出、弥生土器出土
20	中条小学校遺跡［CJS15-7］	下中条町	2015/7/23	6㎡	正岡	遺構・遺物なし
21	宿久庄遺跡［SHK15-1］	宿久庄一丁目	2015/7/23	6㎡	髙村	溝状遺構1条を検出
22	倍賀遺跡［HKA15-1］	畑田町	2015/8/3～6	6㎡	髙村	本書所収
23	倍賀遺跡［HKA15-2］	畑田町	2015/8/3～6	6㎡	髙村	本書所収
24	倍賀遺跡［HKA15-3］	畑田町	2015/8/3～6	6㎡	髙村	本書所収
25	倍賀遺跡［HKA15-4］	畑田町	2015/8/3～6	6㎡	髙村	本書所収
26	牟礼遺跡［MUR15-4］	園田町	2015/8/17	4㎡	髙村	遺構・遺物なし
27	倍賀遺跡［HKA15-5］	畑田町	2015/8/24～27	6㎡	髙村	本書所収
28	倍賀遺跡［HKA15-6］	畑田町	2015/8/24～27	6㎡	髙村	本書所収
29	郡・倍賀遺跡［KOR・HKA15-2］	畑田町	2015/8/24～27	6㎡	髙村	本書所収
30	千提寺菱ヶ谷遺跡［SDH15-1］	大字千提寺	2015/4/23～8/31	226㎡	坂田	本書所収（範囲確認調査）
31	郡遺跡・三島街道［KOR・MSK15-2］	上穂積二丁目	2015/9/7	4㎡	水久保	溝2条を検出
32	郡遺跡・三島街道［KOR・MSK15-3］	上穂積二丁目	2015/9/8	4㎡	水久保	土坑2基・ピット1基を検出
33	中条小学校遺跡［CJS15-8］	奈良町	2015/9/10	6㎡	藤田	溝1条を検出
34	中条小学校遺跡［CJS15-9］	下中条町	2015/9/18	6㎡	髙村	ピット9基・土坑3基を検出
35	茨木遺跡［IBK15-4］	片桐町	2015/9/28	4㎡	髙村	ピット1基・土坑1基を検出
36	倍賀遺跡［HKA15-7］	畑田町	2015/10/23	6㎡	富田	本書所収
37	牟礼遺跡［MUR15-5］	園田町	2015/10/26～28	4㎡	正岡	遺構・遺物なし
38	東奈良遺跡［HN15-15］	東奈良一丁目	2015/11/6	6㎡	富田	遺構・遺物なし
39	倍賀遺跡［HKA15-8］	畑田町	2015/11/17	5㎡	富田	本書所収
40	倍賀遺跡［HKA15-9］	畑田町	2015/11/19	6㎡	富田	本書所収
41	中条小学校遺跡［CJS15-11］	西中条町	2015/11/24	12㎡	藤田	ピット5基を検出
42	穂積廃寺［HZH15-1］	上穂積二丁目	2015/12/8	4㎡	藤田	溝状遺構1条を検出
43	五日市遺跡［ITK15-3］	上野町	2015/12/10	7.5㎡	富田	遺構・遺物なし
44	郡遺跡［KOR15-3］	上穂積四丁目	2015/12/24	5.25㎡	正岡	遺構・遺物なし
45	倍賀遺跡［HKA15-10］	畑田町	2015/12/25	6㎡	髙村	本書所収

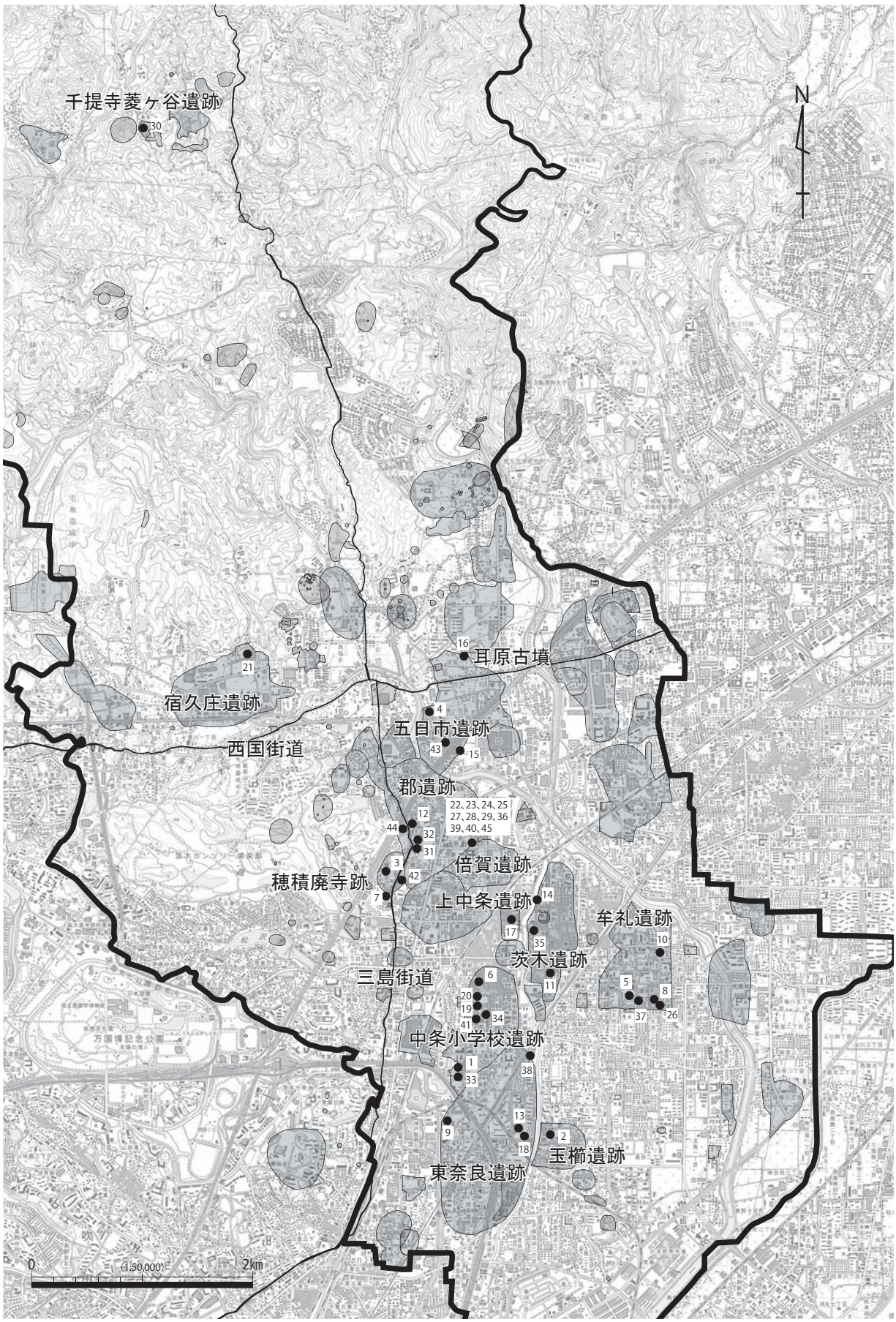


図２　平成 27 年度発掘調査地位置図

第３章　調査の成果

第１節　茨木遺跡（IBK15-1)

調 査 地　大手町773－4
調査期間　平成27年４月15日
調査面積　７㎡
調査担当　水久保祥子　正岡大実

１．調査結果

はじめに　個人住宅建築に伴って確認調査を行ったところ、遺構および遺物を確認したため、本発掘調査を実施した。調査は、建物建築予定部分のうちの7.2㎡を対象として行った。

基本層序　現地表の標高は、約 T.P. ＋ 9.1 mを測る。層序は上層から、1 ～ 4 層（盛土）層厚 0.4 ～ 0.88 m、5 層（2.5Y6/2 灰黄色極細砂混シルト）層厚 0.04 ～ 0.14 m、6 層（2.5Y7/2 灰黄色極細砂混シルト）0.13 ～ 0.24 m、 7 層（2.5Y6/1 黄灰色細砂混砂質シルト）層厚 0.03 ～ 0.07 m、8 層（10YR7/4 にぶい黄橙色極細砂混シルト）となっている。8 層の上面で遺構を検出したが、遺構面は 1 層の旧建物に伴う盛土によって調査区の半分以上の面積が攪乱を受けていた。遺構面の標高は T.P. ＋ 8.34 ～ 8.38 mで、 5 層～ 7 層は陶器や染付、瓦などが出土する近世の包含層である。

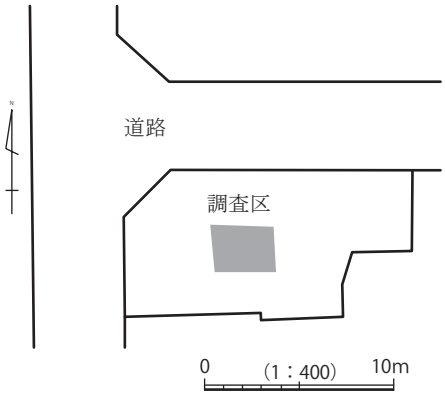


図３　IBK15-1 調査区位置図

遺構・遺物　今次調査では、土坑３基（SK 1 ～ 3）と溝 1 条（SD 1）を検出した。SK 1 は調査区東半で検出した。攪乱により遺構の北半は削平されており、検出した規模は、残存長 1.06 m、残存幅 0.41 m以上、深さ 0.34 mを測る。遺物は、施釉土師器皿の細片が出土している。SK 2 は調査区南西部分で検出した。SK 1 同様、遺構の西半分は攪乱を受けていたが、底辺部は残存していた。検出した平面形は、不整形な隅丸方形を呈し、規模は、一辺約 1 m、深さ 0.26 ～ 0.33 mを測る。遺物は、施釉土師器皿、染付筒型碗、染付碗、陶器碗、陶器灯明皿、備前焼の壺が出土している。SK 1 および SK 2 は出土遺物から、おおよそ 18 世紀前後のものとみられる。SK 3 は調査区南壁際で検出した。遺構の北側を SK

図４　IBK15-1 周辺図（国土地理院 1：25000（吹田）平成 20 年を元に作成）

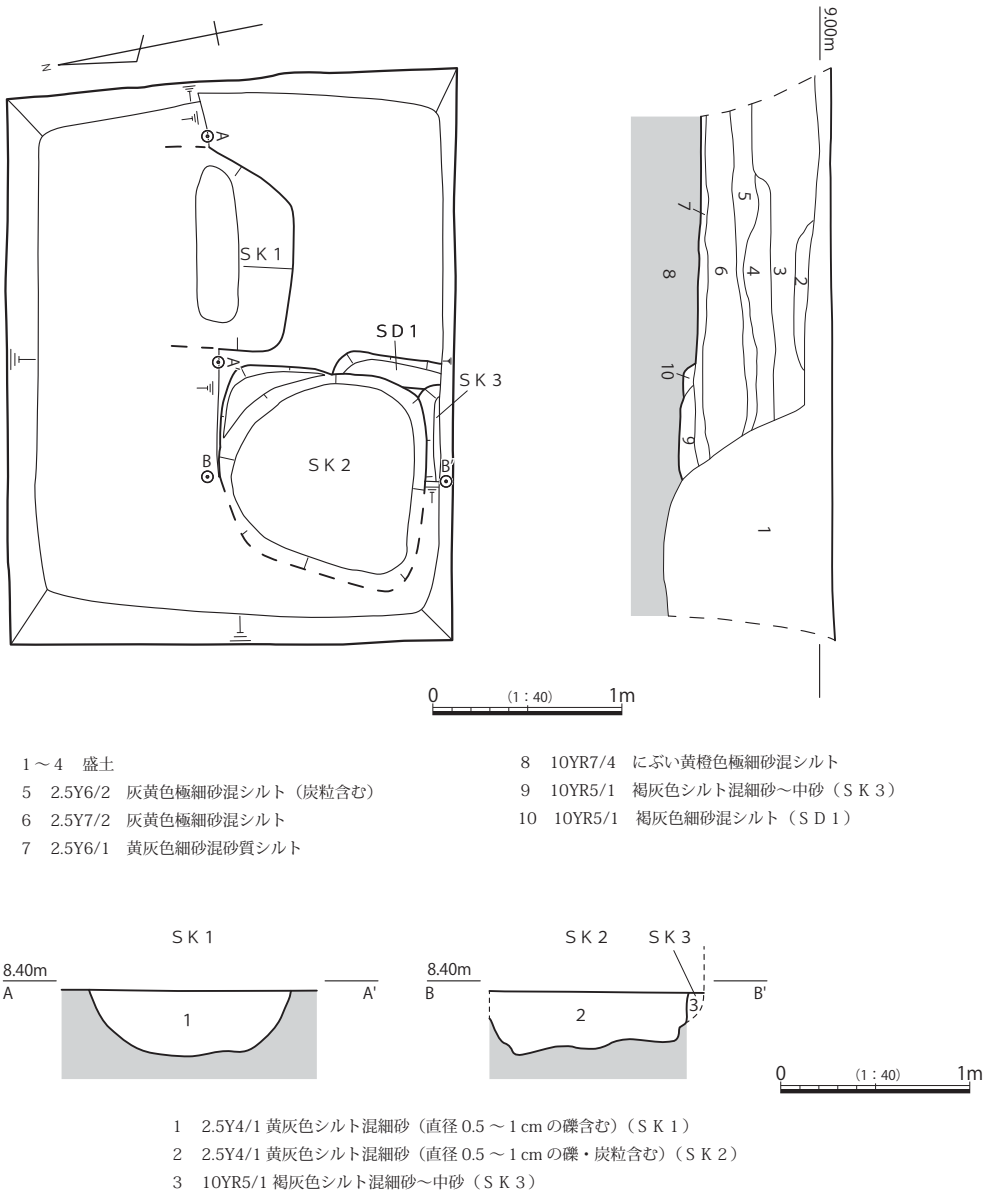


図５　IBK15-1 平・断面図

２によって切られ、さらに調査区の南側へと延びているため、全容は不明である。検出した規模は、残存長 0.5 m、残存幅 0.1 mを測る。SD １は、西側を SK ２および SK ３によって切られており、また、南側は調査区外へと延びる。検出した規模は、幅 0.13 m、長さ 0.54 m以上、深さ 0.06 mを測る。SK ３および SD １からは、遺物は出土していない。

まとめ　今回の調査では、調査区の大部分が攪乱を受けており、遺構面の遺存は狭小であったが、近世の土坑および溝を確認した。茨木遺跡の既往の調査成果では中世から近世の集落跡が主体となっており、今次調査で得られた成果もそれに付するものと思われる。なお、今次調査地を含む宅地造成の際に道路敷部分において本発掘調査を実施しており、８層より下層が脆弱な砂礫層であることが確認されている。その調査結果から、８層以下において遺構面が形成されている可能性は極めて低いと考えられ、今次調査については、８層上面での遺構検出で調査を終えた。しかし、茨木遺跡の埋蔵文化財包蔵地としての時期は古墳時代とされており、古代以前の遺構も確認されている。遺跡内での土層の堆積状況を整理し、各時期の遺構面の広がりについて留意する必要があろう。

第２節　倍賀遺跡（HKA15-1 ～ 15-10）郡・倍賀遺跡（KOR・HKA15-2）

調 査 地　畑田町193番６～19
調査期間　平成27年８月３日～12月25日
調査面積　合計65㎡
調査担当　髙村勇士　富田卓見

１．調査の概要

はじめに　畑田町において計画された個人住宅建設に伴い、上記の期間で、各調査地におよそ６㎡の調査区を設定し（HKA15-8 のみ５㎡）、本発掘調査をおこなった。

上記の発掘調査は、いずれも同じ造成地における調査である。現在は倍賀遺跡と郡遺跡にまたがって位置し、個別の「発掘届出」に基づく調査ではあるが、下記の基本層序も概ね共通することから、当該地は一体的に捉えるべきである。したがって、便宜的に一連の調査としてまとめて報告する。

今次調査地周辺の倍賀遺跡や郡遺跡は、これまでの発掘調査において、弥生時代から中世までの遺構、遺物が重層的に出土しており、比較的密度の濃い複合遺跡として知られる。

基本層序　現地表面の標高は、T.P. ＋ 15.8 ～ 16.2 mである。調査の結果、得られた基本層序は、１層　盛土、２層　耕作土、３層　耕盤造成土、４層　包含層、５層　地山である。

１層は昨年の宅地造成時に盛られた土である。２層は近年まで利用されていた耕作土であり、３層は２層に伴う造成土である。したがって、３層より上位は、近現代以降に属する。

４層の包含層からは、全調査区を通して６世紀頃の須恵器や土師器を中心に、弥生時代から中世までの土器が出土している（図 10）。ただし、中世の土器は、４層最上部付近から出土し、点数も限られることから、上層からの混入である可能性が高い。このように、各時代の遺物が出土することから、少なくとも周辺には複数時代の遺構面が存在したと考えられ、既往の調査によって指摘されている複合遺跡としての性格と符合する。

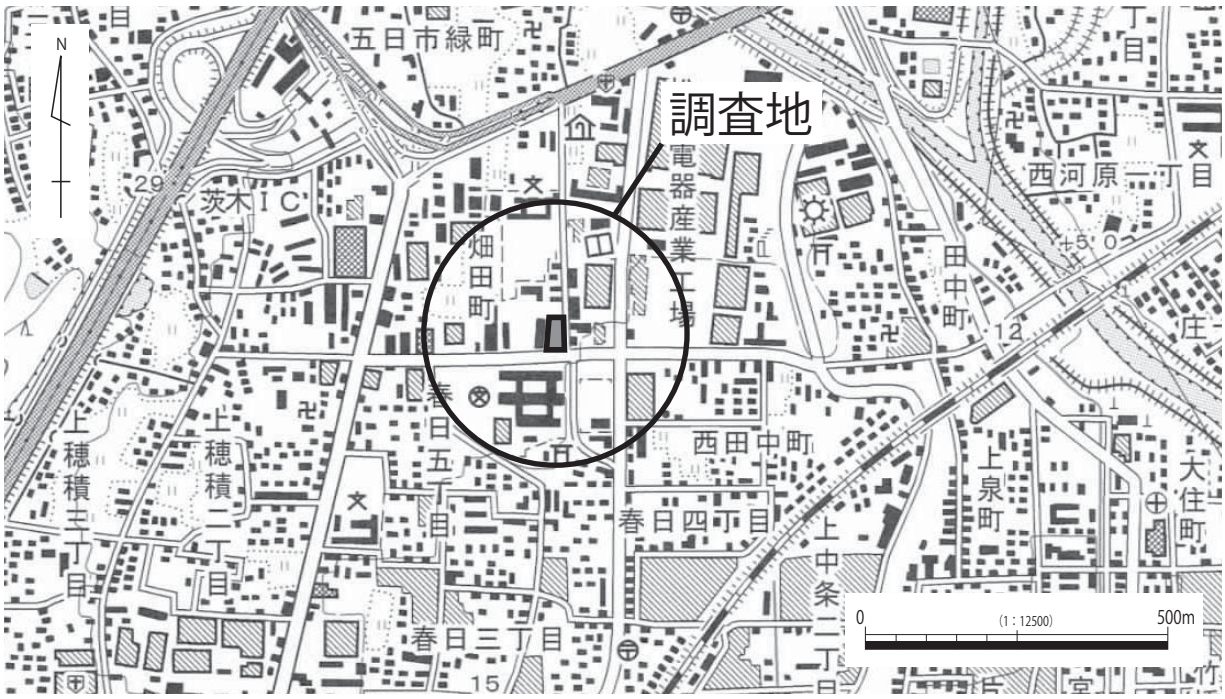


図６　調査地周辺図（国土地理院 1:25000（吹田）平成 20 年を元に作成）

遺構は、５層の地山上面において検出した。５層上面はおよそ T.P. ＋ 14.1 ～ 14.4m である。HKA15-4、6、7、9 は５層上面が 0.1 ～ 0.3m 程度低いことから、調査地北東部はやや落ち込んだ地形であったと考えられる。それにともなって、上記の調査区は、４層が比較的厚く、一部調査区においては、４層の内部を４a、4b、4c と細分したところもある。

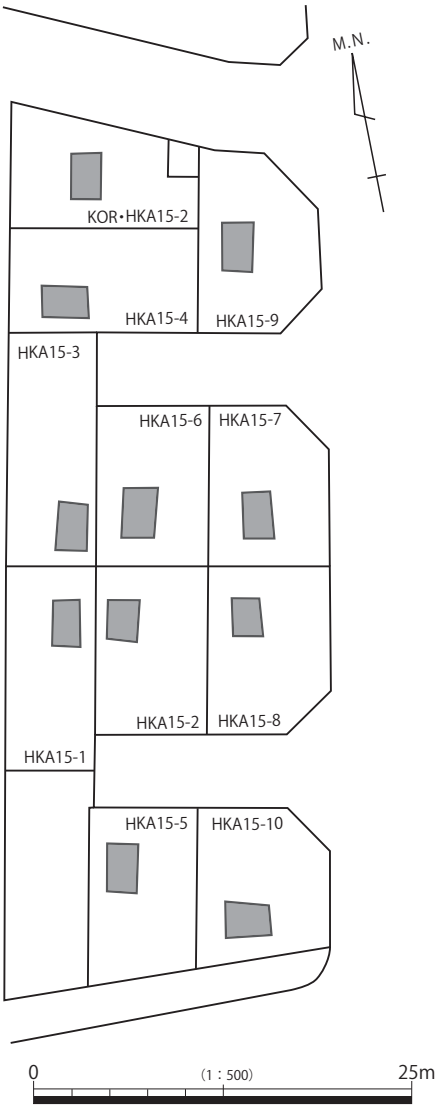


図７　調査区配置図

２．各調査区遺構

HKA15-1

今次調査区において､柱穴１基（SP １）及び溝１条（SD １）を検出した。SP １は、直径約 0.2 mの円形で、遺構面からの深さ約 0.2 mを測る。埋土は 10YR3/1 黒褐色細砂混粘質シルトである。調査区内において確認できた柱穴は１基のみであるため、この柱穴がどのような建物を構成するかなど、その性格等は不明である。SD １は、今次調査区内では北端部において、北方向に落ちる遺構を確認するのみであるが、今次調査区の東に位置する HKA15-2、HKA15-8 において、同様に北方向に落ちる遺構を検出していること、また今次調査区の北隣に位置する HKA15-3 において、その北側の肩が検出できないことから、HKA15-1 と HKA15-3 の間に北側の肩を持つ東西方向の溝と推測できる。SD １は、最深部で遺構面より約 0.42 mを測り、埋土は 10YR3/1 黒褐色中砂～細砂混粘質シルトで直径 15cm までの礫や土器を多く含む。SD １より出土する遺物は、奈良時代所産と思われる土師器も散見するが、その数は少なく、古墳時代後半の所産と考えられる須恵器坏が一定数見られる（図 11）。また、包含層において出土する弥生土器が見られないことから、SD １の所属時期は６世紀後半を中心とすると考えて大過ないと思われる。

HKA15-2

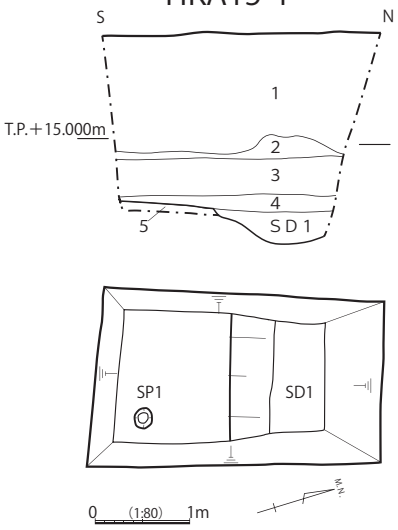
今次調査区では、前述のとおり HKA15-1 から連続する東西溝（SD １）の一部を検出した。今次調査区においても、SD １はほぼ東西方向に延びており、HKA15- ８に連続すると考えられる。また、実測に堪えうるものは無かったが、SD １から出土する遺物は HKA15-1 とほぼ同様と考えて支障はない。

HKA15-3

今次調査区において検出した遺構は、柱穴７基（SD １～７）と溝１条（SD １）である。

柱穴は、いずれも小規模で、その深度は検出面より 0.1 ～ 0.15 m程度と浅い。SP １、SP ２の埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、SP ３、SP ４の埋土は、10YR4/2 褐灰色粘質シルトである。形状や埋土にある程度の共通性が見られ、なんらかの建物を構成するものと考えられるが、どのように何棟構成するかは判然としない。SD １は、幅約 0.5 mから 0.6 m深さ約 0.2 mの調査区南から東へ蛇行する溝である。SD １は、SP １、SP ３に負けており、その埋土は 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂混粘質シルトで、

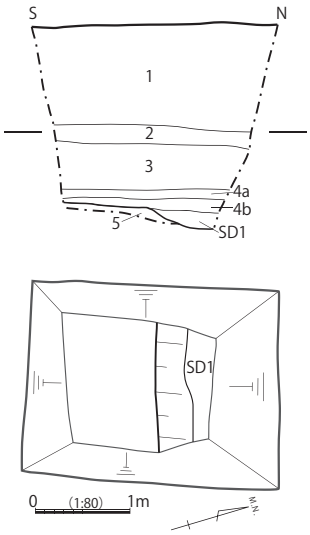
HKA15-1



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　わずかに細砂混じる〔耕盤造成土〕
4　10YR4/2細砂混粘質シルト
　しまり良い〔包含層〕
5　2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト
　Φ～3cm礫含む〔地山〕

SD1　10YR3/1黒褐色中～細砂混粘質シルト

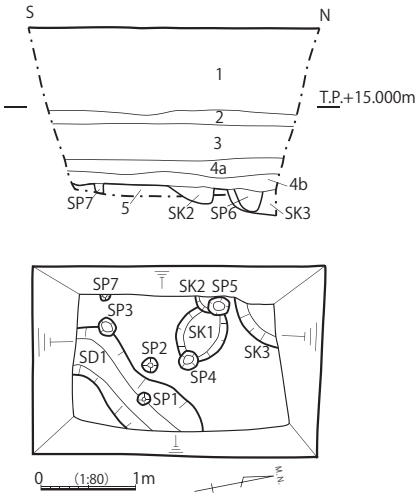
HKA15-2



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　細砂わずかに混じる〔耕盤造成土〕
4 a　10YR4/2　細砂混粘質シルト
　しまり良い〔包含層〕
4 b　10YR4/3　極細砂～砂質シルト
　Φ1～8㎝礫含む〔包含層〕
5　2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト
　Φ～3㎝礫含む〔地山〕

SD 1　10YR3/1黒褐色細砂混粘質シルト
　土器、Φ～15㎝の礫下部に多く含む

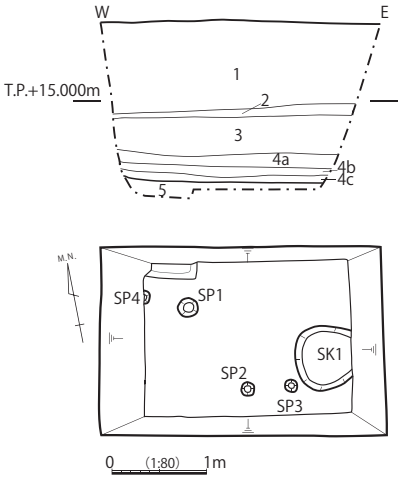
HKA15-3



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　細砂わずかに含む〔耕盤造成土〕
4 a　10YR4/2灰黄褐色細砂混粘質シルト
　しまり良い〔包含層〕
4 b　10YR3/2黒褐色中砂混粘質シルト〔包含層〕
5　2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト
　Φ～3 cm礫含む〔地山〕

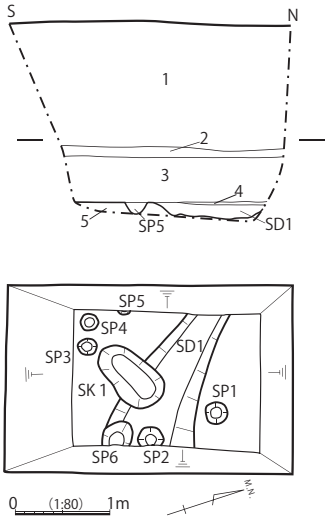
SK2　2.5Y5/1黄灰色細砂混粘質シルト
SK3　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
SP6　2.5Y5/2暗灰黄色中～細砂混粘質シルト
SP7　2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト

HKA15-4



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　細砂わずかに混じる〔耕盤造成土〕
4 a　10YR4/2細砂混粘質シルト
　しまり良い〔包含層〕
4 b　10YR4/1褐灰色細砂混砂質シルト〔包含層〕
4 c　10YR3/3暗褐色中砂混粘質シルト〔包含層〕
5　2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト
　Φ～3cm礫含む〔地山〕

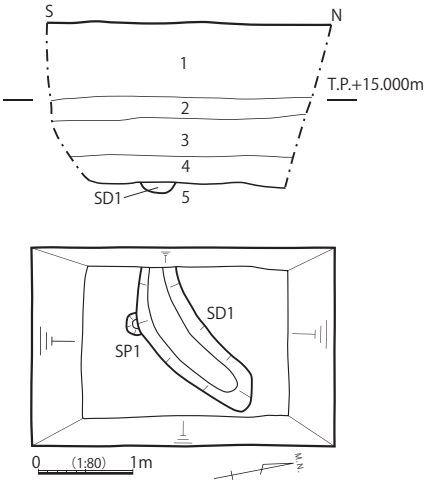
HKA15-5



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　細砂わずかに混じる〔耕盤造成土〕
4　10YR4/2灰黄褐色細砂混粘質シルト
　しまり良い〔包含層〕
5　2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト
　Φ～3cm礫含む〔地山〕

SP5　10YR3/2黒褐色粘質シルト
　下部に細砂混じる
SD1　2.5Y4/3オリーブ褐色細砂混砂質シルト
　土器含む

HKA15-6



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　わずかに細砂混じる〔耕盤造成土〕
4　10YR4/2灰黄褐色細砂混粘質シルト
　しまり良い〔包含層〕
5　2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト
　Φ～3cm礫含む〔地山〕

SD1　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト
　5〔地山〕ブロック含む

図８　HKA15-1 ～ HKA15-6　平・断面図

柱穴と埋土の様相が異なるため、その先後関係や存続時期が大きく異なることは分かるが、いずれからも遺物は確認できず、その所属時代は不明である。なお、SP ６は西壁断面において確認できたが、平面上で検出することができなかった。

HKA15-4

今次調査区において検出した遺構は、柱穴５基（SP １～５）と土坑１基（SK １）である。

SP ４、SP ５は、調査区西壁断面の観察により、包含層中（4c 上面）から切り込んでいることが確認できた。また、SK １は東側が調査区外に延びているため、調査区東壁断面の観察によって、ベース面より切り込む遺構であることが確認できた。その他の遺構は不明であるが、その埋土の質色は概ねSK １と同様と判断できる。このことから、遺構の所属時期によって、SK １、SP １、SP ２、SP ３と、SP ４、SP ５の二つに分けることができ、前者より後者が新しいと考えられる。

SP ４、SP ５は一つの建物を構成する柱穴である可能性がある。その場合、調査区西側に建物が想定できる。また、SP １、SP ２、SP ３はどのように建物を構成するか判然としない。SK1 は、検出面よりごく浅く遺物も出土しなかったことから、その機能や性格も不明である。また、SP ２より遺物が出土したが、摩滅が著しく器種や所属時期の特定には至らない。

HKA15-5

今次調査区において、平面上検出できた遺構は、柱穴６基（SP １～６）、溝１条（SD １）、土坑１基（SK １）であるが、いずれも 10㎝程度掘りすぎており、遺構の上部は削平してしまった。そのため、SD １は調査区の北半を東西にとおっていたと考えられるが、平面としては、その底部が部分的にしか検出できなかった。また、SP ５は西壁断面において確認できたが、平面上は検出できなかった。

また、SD １は SP ２や SP ６、SK １に切られていることを確認した。このことから、SD １埋没後、柱穴や土坑が掘削されたと考えられるが、その詳細な時期は不明である。また、柱穴はいくつかの建物を構成したものと考えられるが、それも判然としない。

HKA15-6

今次調査区において検出した遺構は、柱穴１基（SP １）、溝１条（SD １）である。また、北部にベース面の落ち込みが見られた。SP1 以外に柱穴は確認できず、どのように建物を構成したかは不明である。但し、SD １が SP １を切っていることが確認できた。よって、SP １が埋没した後、SD １が作られたと考えられるが、その時期は不明である。また、SD １は、調査区を西から北東に蛇行する。西は調査区外に伸び、北東は北側落ち込みの手前で検出できなくなる。この SD １は HKA15-3 で見られた南から東へ蛇行する溝に連続する可能性がある。

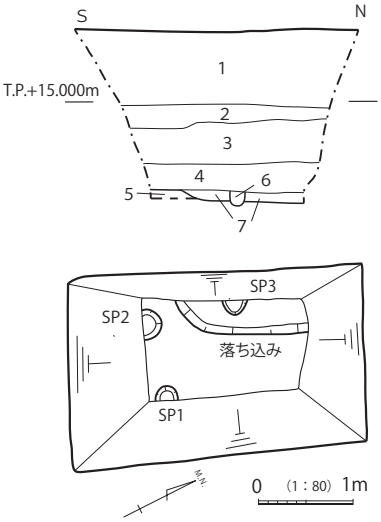
HKA15-7

今次調査区では、ピット状遺構３基（SP １～３）、落ち込み１箇所を確認した。SP １は径約 0.25 m、深さ約 0.1 m、SP ２は径約 0.28 m、深さ約 0.09 m、SP ３は径約 0.24 m、深さ約 0.16 mを測る。落ち込みは、調査区中央から西壁に向けて下がっており、深さ約 0.1 mを測る。SP ３と落ち込みは切りあっており、土層断面観察の結果、SP3 が新しい時期のものである。各遺構内から遺物が出土していないため、時期などの詳細は不明である。

HKA15-8

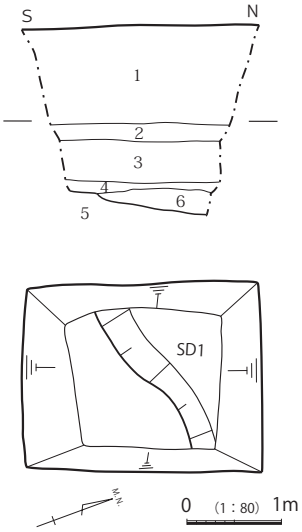
今次調査区では、溝１条（SD １）を確認した。SD １は、調査区中央から北に向けて掘りこまれており、長さ約 1.5 m、深さ約 0.3 mを測る。西隣地で実施した調査（HKA15-1、2）でも、SD １と同様

HKA15-7



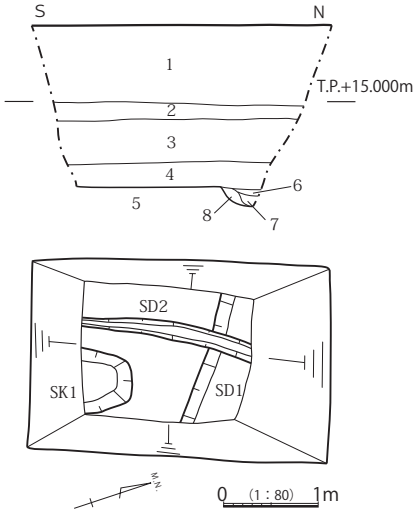
1　盛土
2　N4/灰色細粒砂〔耕作土〕
3　2.5Y6/4にぶい黄色粘質シルト、
　～Φ3mmの礫を少量含む〔耕盤造成土〕
4　10YR3/2黒褐色粘質シルト、
　～Φ1cmの礫を多く、土器片を少量含む〔包含層〕
5　10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂、
　～Φ4cmの礫を非常に多く含む〔地山〕
6　10YR4/1褐灰色粘質シルト、
　７のブロックを少量含む
7　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト、
　Φ～１cmの礫を微量含む

HKA15-8



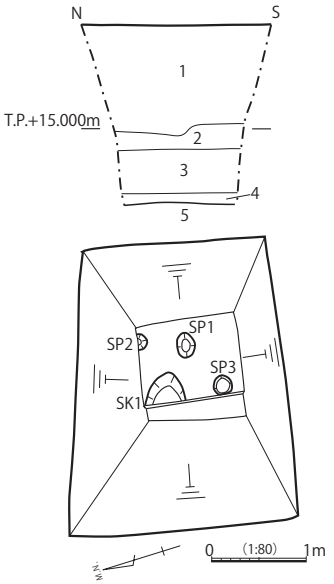
1　盛土
2　N4/灰色細粒砂〔耕作土〕
3　10YR7/3にぶい黄橙色粘質シルト〔耕盤造成土〕
4　10YR4/4褐色粗砂まじり極細粒砂、
　～Φ1cmの礫を少量・土器片を多く含む〔包含層〕
5　10YR6/6明黄褐色粗砂まじり極細粒砂、
　～Φ3cmの礫を多く含む〔地山〕
6　10YR3/3暗褐色微砂まじり極細粒砂、
　土器片を多く含む、
　Φ～5cmの礫と５のブロックを少量含む

HKA15-9



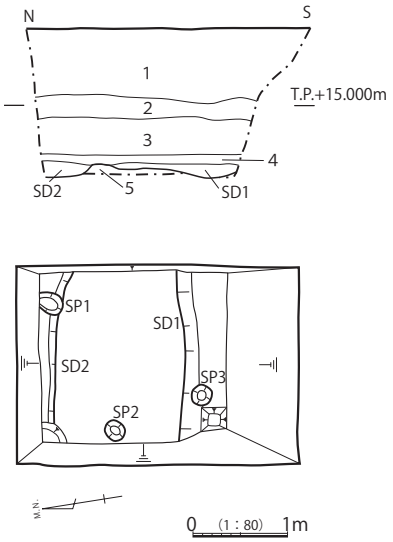
1　盛土
2　N4/灰色細粒砂〔耕作土〕
3　10RY7/3にぶい黄橙色粘質シルト〔耕盤造成土〕
4　10YR3/3暗褐色粗砂まじり極細粒砂、
　～Φ2cmの礫を少量・土器片を多く含む〔包含層〕
5　10YR5/6黄褐色極細粒砂、
　～Φ4cmの礫を少量含む〔地山〕
6　10YR3/1黒褐色粗砂まじり極細粒砂、
　Φ～5cmの礫と土器片を多く含む
7　10YR4/1褐灰色シルト～粘質シルト
8　10YR4/1褐灰色シルト、
　５のブロックを多く含む

HKA15-10



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　わずかに細砂混じる〔耕盤造成土〕
4　10YR3/3暗褐色極細砂混粘質シルト
　炭化物粒、５〔地山〕ブロック含む
5　10Y6/8明黄褐色粘質シルト
　Φ～3㎝礫含む〔地山〕

KOR・HKA15-2



1　盛土
2　N4/灰色砂質シルト〔耕作土〕
3　2.5Y6/2灰黄色粘質シルト
　わずかに細砂混じる〔耕盤造成土〕
4　10YR4/2細砂混粘質シルト
　Φ３～10㎝礫含む〔包含層〕
5　2.5Y6/6明黄褐色粘質シルト
　Φ～３㎝礫含む〔地山〕

図９　HKA15-7 ～ HKA15-10、KOR・HKA15-2　平・断面図

に北側への掘り込みを確認しており、同一の溝である可能性が考えられる。溝の北肩は調査区外にあるため、全容は不明である。

HKA15-9

今次調査区では、土坑１基（SK １）、溝２条（SD １、２）を確認した。SK １は径約 0.65 m、深さ約 0.04 mを測る。SD １は調査区北端で東西方向に伸びており、長さ約 1.4 m、幅 0.55 m以上、深さ約 0.2 mを測る。溝の北肩は調査区外にあるため、全容は不明である。SD ２は南北方向に延びており、長さ約 1.8 m、幅約 0.2 m、深さ約 0.05 mを測る。SD １、２は切りあっており、新旧関係は SD ２が新しい時期のものである。また、両溝内から土器が出土した。SD ２からは弥生土器の体部片が、SD ２からは土師器片が出土した。ともに細片であるため、図化はできなかった。

HKA15-10

検出した遺構は、柱穴３基（SP １～３）、土坑１基（SK １）である。いずれにおいても、その深度は浅く、遺構内から遺物は確認できなかった。そのため、遺構の時期や性格は判然としない。ただし、各遺構の土色・質も概ね同様である。SK １には様々なブロック状の土が不均一に入っている様子が顕著に見られ、一度に埋められたと推測できる。

KOR・HKA15-2

検出した遺構は、柱穴３基（SP １～３）、溝２条（SD １、２）である。SP １、SP ２、SP ３は、その配置や、それぞれ埋土の状況が異なることから、同一時期に存在した柱穴とは想定しがたい。また、SP １は、SD ２を切っており、その先後関係が判明する。SD １は、その南側が調査区外にのびており、その全容は不明である。ベース面の落ち込みとも考えられる。また、SD １掘削後、SP ３を確認した。いずれの遺構からも土師器片がわずかに出土しているが、時期の特定には至らない。ただし、SP ３には須恵器片も混じり、SP ３は須恵器出現期以降に属する遺構である。

３．遺物

遺物は、各調査区より出土した。１～ 14 は各調査区の基本層序４層である包含層より出土したもの、15 ～ 23 は HKA15-1・HKA15-2・HKA15-8 で検出した一連の溝と考えられる SD １から出土したものである。

包含層

１～４は、甕底部である。１は底径 5.0cm、残存高 2.0cm を測る。２は底径 5.6cm、残存高 1.8cm を測る。１・２は磨滅が激しく、調整は不明である。３は底径 5.7cm、残存高 2.8cm を測り、外面にユビオサエの調整痕が見られる。４は底径 5.2cm、残存高 3.8cm を測り、外面にタタキとユビオサエの調整痕が見られる。これらは弥生時代後期のものである。５は、用途不明の土製品である。最大径 5.7cm、器高 3.9cm を測る。栓のような形状で、最大円の中心部に膨らみをもつ。６は、土師器把手である。長さ 4.5cm、径 1.5cm を測る。断面は不定形な円形で、先端部は尖りながらわずかに上方を向く。7 は口径 20.2cm を測る土師器甕である。口縁部は外反し、その端部を上方に小さくつまみ面をなす。奈良時代の所産であろうか。8 は高杯である。杯部の残りはよくないものの、深めの椀状を呈するものと思われる。脚部には小さな円形をなす透孔があり、三か所に穿たれていたと考えられる。庄内期の所産であろう。９は、須恵器坏蓋である。把手部分は径 2.8cm、高さ 0.7cm を測り、中央部が凹状を成す。古墳時代後期頃のものであろう。10 は須恵器杯蓋である。口径 13.9cm、器高 4.5cm を測る。天井部と口縁部の境にある稜は小さな凹みを残すのみである。口縁部は直下に下るもので、その端部内

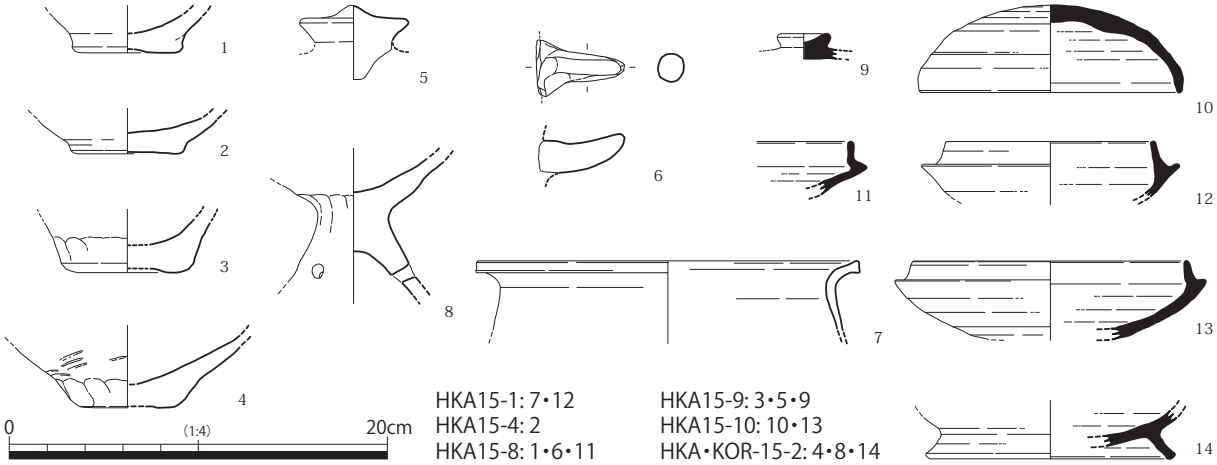


図 10　各調査区　包含層出土土器実測図

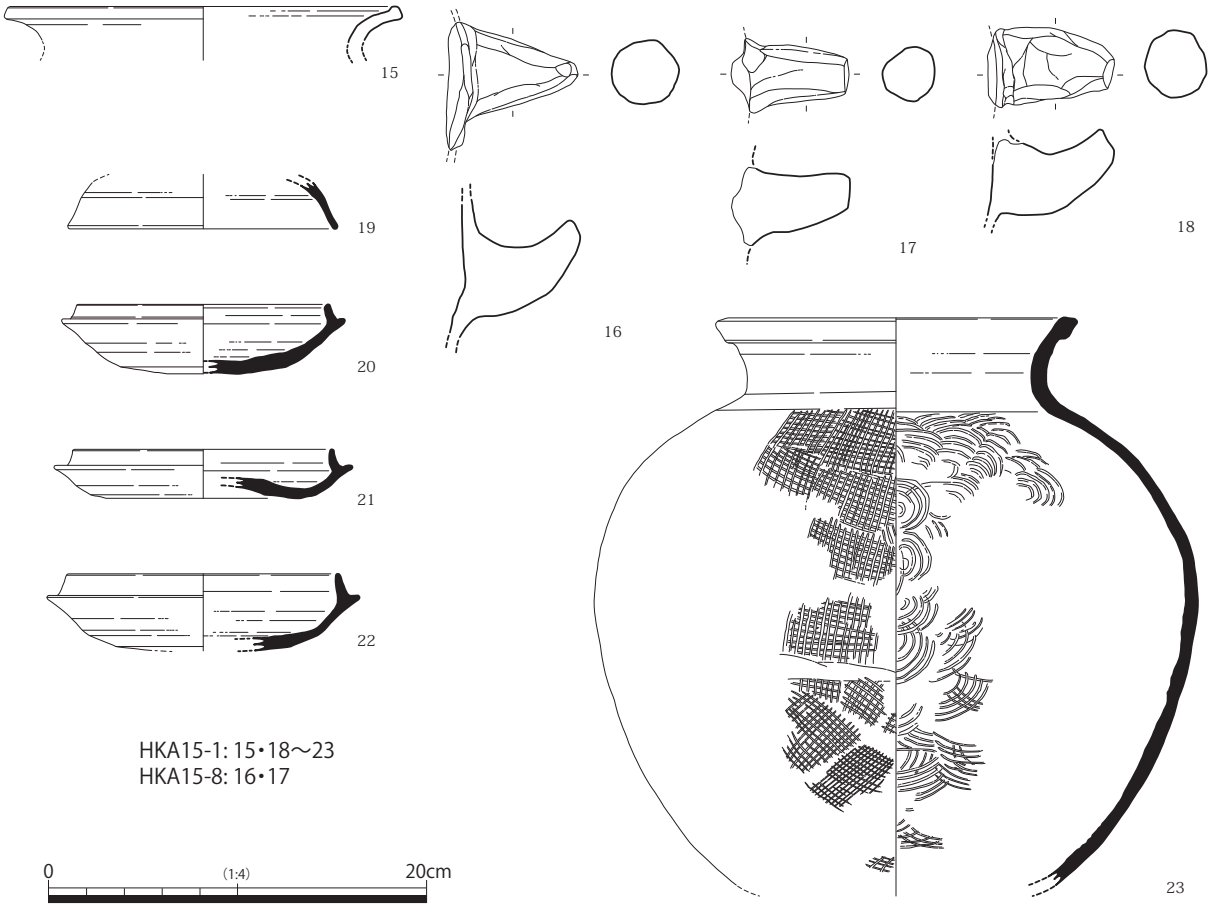


図 11　HKA15-1、HKA15-2、HKA15-8　SD1 出土土器実測図

面は小さな段を有する。天井部は丸く、その約半分に回転ヘラ削り調整を施している。11 は、須恵器杯身である。残存高は 2.8cm を測る。12・13 は須恵器杯身である。12 は口径 11.0cm を測る。立ち上がりはやや高く、口縁端部は小さな内傾する面をもつがシャープではない。13 は口径 14.5cm を測る。立ち上がりは短く、口縁端部は丸くおさめる。受部は短く水平である。ともに 6 世紀後半の時期と考えてよいだろう。14 は台付壺になるものであろう。高台は短くハの字形に開くもので、径は 12.6cm を測る。全体に器壁は薄く仕上がっている。

HKA15-1、15-2、15-8　SD 1

15 は口径 20.6cm を測る土師器甕である。口縁部は大きく外湾し、その端部は丸く肥厚させて面をなす。奈良時代の所産であろう。16 ～ 18 は、土師器把手である。16 は長さ 5.3cm、径 3.3cm を測り、断面は不定形な円形である。平面形は三角形で、先端部は上方に向けて尖っている形状である。17 は長さ 5.2cm、径 2.8cm を測り、断面は不定形な円形である。体部から水平ぎみにのび、先端に面をもつ。18 は長さ 5.8cm、径 3.6cm を測り、断面は不定形な円形である。平面形は三角形に近く、ゆるく上方を向く。先端部はわずかに尖りながら先端に面をもつ。19 は須恵器の杯蓋である。天井部と口縁部との境にある稜はわずかに残る程度である。口縁部は短くハの字形にひろがり、端部は丸くおさめる。20 ～ 22 は須恵器の杯身である。口径は 13.3 ～ 14.3㎝を測る。器高は最も高いもので 4.1㎝（22）と全体的に扁平である。21 は焼け歪んでおり底部は上げ底状となっている。いずれも立ち上がりは短く内傾し受部は短い。口縁端部は丸く終わるもの（21･22）、内傾する小さな面をもつもの（20）がある。底部外面の約半分は回転ヘラ削りによって調整されている。6 世紀後半の時期と考えられる。23 は口径 19㎝を測る須恵器甕である。口縁部は短く外反し、その端部は折り曲げて凸帯状に肥厚する。外面は平行叩き、内面には同心円叩きがみられる。

４．まとめ

今回の一連の調査において、不明な点が多いながらも、弥生時代の遺構と６世紀後半の遺構を検出した。また、包含層中からも、それらと同時代の遺物が出土している。周辺の既往調査を案ずるに、平成３年度に今回の調査地の北西でおこなわれた株式会社孔官堂倉庫建設に伴う発掘調査では、弥生時代中期の方形周溝墓や、奈良時代の総柱建物を含む掘立柱建物群、古代末から中世の掘立柱建物群などが確認されている。また、平成 14 年度に今回の調査地の北東でおこなわれた、茨木市立生涯学習センター建設事業に伴う発掘調査では、弥生時代から中世の遺構がまとまって出土しているが、古墳時代においては５世紀代の遺物が多く検出されている。今回の一連の調査では、既往の調査では見られなかった６世紀後半所産の遺物が、ある程度のまとまりをもって確認できたことは重要である。今次調査地周辺で時期によって若干位置を変えながら、古墳時代を通して集落が営まれていたことが想定できたことは、今回の一連の調査の大きな成果である。

今後のさらなる調査と整理によって、倍賀遺跡や郡遺跡のより具体的な様相が明らかとなることを期待したい。

参考文献

茨木市教育委員会 1993『郡遺跡発掘調査概報』（株式会社孔官堂倉庫建設に伴う調査）

茨木市教育委員会 2005『郡遺跡発掘調査概要報告』- 茨木市生涯学習センター建設事業に伴う発掘調査概要報告 -

第３節　耳原古墳 MHK15-1（範囲確認調査）

調 査 地　大阪府茨木市耳原三丁目746及び
茨木市耳原三丁目１－１
調査期間　平成27年７月６日～７月23日
調査面積　約65㎡（トレンチ１～４）
調査担当　藤田徹也・正岡大実

１．調査に至る経緯と経過

はじめに　茨木市耳原三丁目に位置する耳原古墳は、帝人株式会社（以下テイジンとする）の敷地内に所在する（平成 28 年３月 31 現在）。早くより石室が開口していたことで周知のものとなっていた本古墳は、平成６年の大阪府史跡指定以後、同社管理の下に希望者に随時見学可能な状況にあり、地域住民に親しまれてきた。そうした中、平成 27 年１月に計画されたテイジンの移転計画のため、同年２月末日をもって本古墳の公開は一時的にこれを取りやめることとなっていた。

そこで、移転計画の一環としてテイジンからの依頼によって、耳原古墳の大阪府史跡としての範囲確認を行う必要性が生じることとなった。このことについて大阪府教育委員会と茨木市教育委員会で協議した結果、同古墳の南及び西側を中心とした裾部付近にトレンチを設けて古墳の範囲確認調査を行うこととなり、その調査については大阪府教育委員会の指導の下、茨木市教育委員会が主体となって実施することとなった。そのため、茨木市教育委員会としては大阪府教育委員会教育長宛に大阪府史跡の現状変更届を進達するとともに許可書発行の後、現地調査に取り掛かることとした。

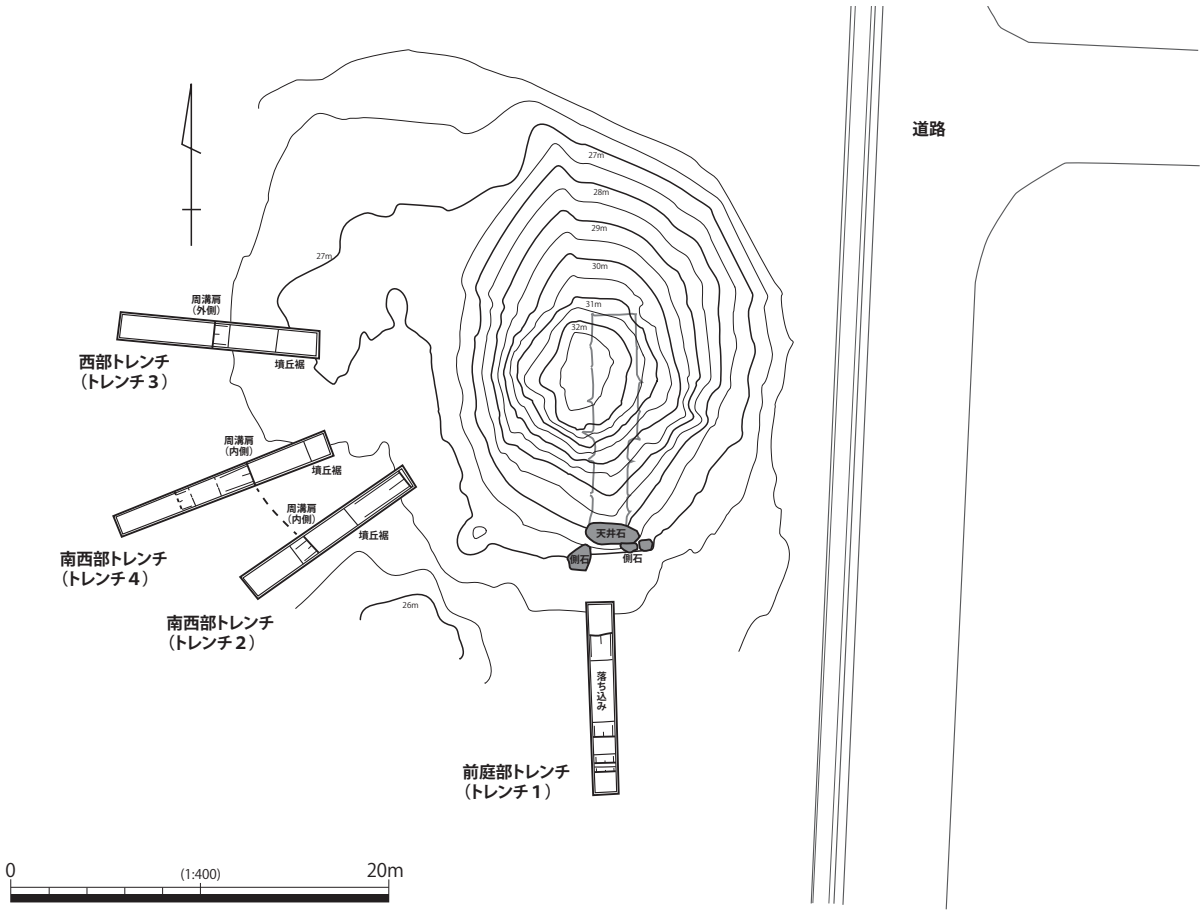


図 12　墳丘測量図・範囲確認トレンチ配置図

調査の概要　当該地は、大正元年及び昭和９年に墳丘及び石室等の測量調査が行われている。しかしながら、これらの測量図に示される墳丘と現況地形との間には差異が認められたため、今回の確認調査にあたっては墳丘及び周辺の測量も新規に実施することとした。確認トレンチは現状の古墳の墳丘裾と周溝などの外部施設の存在なども考慮に入れたうえで、下記の４ラインを対象として設定した（図 12）。

トレンチ１：石室羨道部の延長ライン（前庭部トレンチ）

トレンチ２：トレンチ１とトレンチ３の中間ライン（南西部トレンチ）

トレンチ３：石室奥壁と直交するように西側に延長したライン（西部トレンチ）

トレンチ４：トレンチ２と３の中間ライン（南西部トレンチ）

調査の期間は冒頭に掲げたとおり、平成 27 年７月２日より現地測量開始、トレンチ掘削による発掘は７月６日より開始し、７月 23 日の埋戻しをもってすべての確認調査を完了している。なお、調査期間中には、７月 10 日に茨木市文化財保護審議会委員の菱田哲郎氏（京都府立大学教授）、７月 16 日に大阪府文化財保護審議会委員長の和田晴吾氏（立命館大学名誉教授）・大阪府教育委員会文化財保護課の視察をうけ、調査にあたっての指導･助言を得た。以下に各トレンチの調査成果を述べることとする。

２．トレンチ１（図 13）

前庭部の状況によって古墳の裾を確定する情報を収集するために、幅 1.5 m、総延長 10.2 mのトレンチを設定した。結果として、トレンチ北側において古墳時代の須恵器を含む地山層の直上に残存する墳丘盛土状の層準を確認するとともに、トレンチの大部分において中世ないし近世以後の大規模な落ち込みによる攪乱を受けていることを確認した。

羨道部付近で確認した盛土状の地層は、地山である黄褐色シルトを偽礫状に多数含むものであり、その他のトレンチで確認した墳丘盛土に極めて近似した層相を示している。したがって、この層準については古墳を構成する地層の可能性が高いと判断されるが、今回の調査では確認した部分が限定されることから、その性格については不明とせざるを得ない。なお、この層準は南側で中近世の落ち込みに攪乱を受けているため、その端部についての情報も得ることはできなかった。

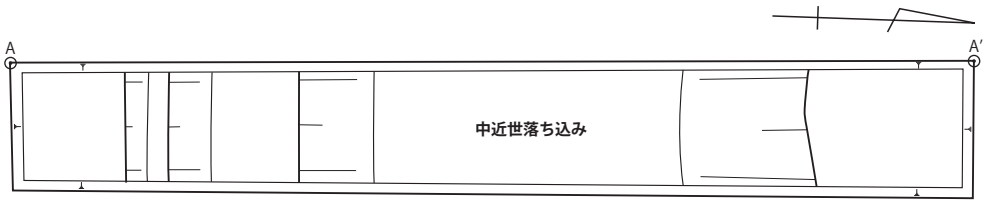
トレンチの大半で確認した中近世の落ち込みは、約７mに及ぶ大振りなものであり、埋土中からは多量の瓦（図 15 － 5 ～ 7）のほか、聖母マリアを模したとみられる型造りの土人形（図 15 － 9）、祠の可能性のある瓦質製品（図 15 － 8）などが出土している。この落ち込みについては、耳原古墳の付近にはかつて小規模な堂があったとされていることから、そうした堂の解体によって生じた廃材を遺棄したものの可能性が高い。なお、出土した遺物のうち古墳時代に帰属するものとしては、須恵器杯身２点、甕口縁部１点、高杯脚部片？１点（図 15 － 1 ～ 4）をそれぞれ確認している。須恵器杯身はその形状から６世紀中～後葉（MT85 ～ TK43 型式）に帰属するものと考えることができ、これらの資料が古墳の帰属年代を示す可能性が高いことが判明した。

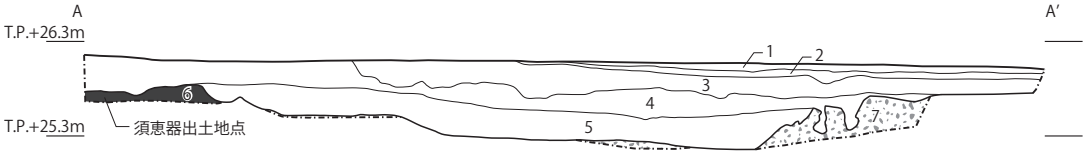
３．トレンチ２（図 13）

古墳南西部における墳丘裾の位置を確認することを目的として、幅 1.5 m、総延長 10.4 mのトレンチを設定した。結果として、トレンチ北東側において地山層の直上に構築された墳丘盛土を確認し、古墳外側にあたる南西部では､周溝の可能性のある層準や中世以後の落ち込みが存在することを確認した。

墳丘の盛土は、暗灰～にぶい黄褐色細礫混じり砂質シルトに地山であるにぶい黄色シルトを偽礫状に多数含むものを基調とし、これらの層準が 0.1 ～ 0.2 m程度の単位で交互に盛られる状況を確認した。それぞれの層界は偽礫が扁平化していることもあり、肉眼での観察でもその判別は容易であった。さら

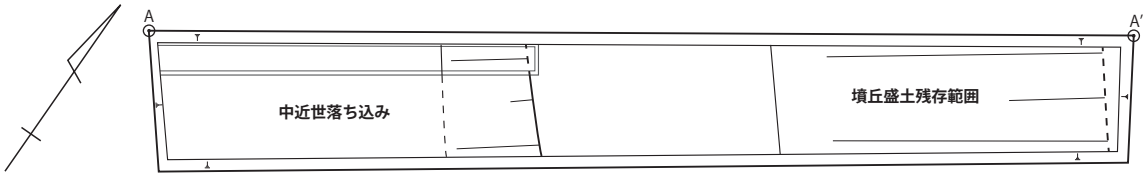
トレンチ１

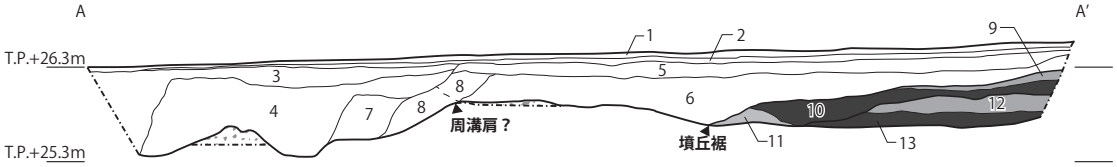




1　5Y5/2 灰オリーブ色　粗砂混じり極細砂〔表土〕
2　10YR6/6 明黄褐色　中～粗砂〔造成真砂土〕
3　2.5Y5/2 暗灰黄色　細～中礫混じり極細砂（淘汰悪い。しまり悪い。Φ５cm 大の礫を多く含む。瓦を多く含む）〔造成土？〕
4　2.5Y5/3 黄褐色　砂質シルト（淘汰やや良い。しまりやや悪い。細礫を微量含む）〔中近世落ち込み上層〕
5　2.5Y6/3 にぶい黄色　粘質シルト（淘汰良い。しまり悪い。下半中心にベース土ブロックを含む。最下部に瓦片を含む）〔中近世落ち込み下層〕
6　10YR4/1 褐灰色　中砂混じり砂質シルト（淘汰良い。しまり良い。ベース土ブロック（Φ１～２cm）をやや多く含む。層上半を中心にベース土ブロックが層状に入る）〔墳丘盛土？〕
7　2.5Y6/4 にぶい黄色　砂質シルト（淘汰良い。しまり良い）〔ベース土〕

トレンチ２





1　5Y4/1 灰色　粗砂混じり極細砂〔表土〕
2　2.5Y6/4 にぶい黄色　中～粗砂〔造成真砂土〕
3　5Y7/3 浅黄色　粗砂～細礫混じり細砂〔現代撹乱土〕
4　10YR4/2 灰黄褐色　粗砂～極粗砂混じり砂質シルト（東側中心にベース土ブロック及び墳丘盛土起源のブロック土をやや多く含む）〔木根撹乱？〕
5　2.5Y6/3 にぶい黄色　中～極粗砂〔造成真砂土〕
6　10YR4/2 灰黄褐色　細～中礫混じり極細砂（淘汰悪い。しまり悪い。最下部から瓦片出土）〔中近世落ち込み〕
7　2.5Y6/4 にぶい黄色　細～中礫混じり極細砂（淘汰悪い。しまり良い。拳大の礫を多く含む。ベース土層に近似）〔木根撹乱？〕
8　10YR4/3 にぶい黄褐色　極細砂（淘汰良い。しまり良い。ベース土ブロック（Φ２～３cm 大）をやや多く含む）〔周溝埋土？木根撹乱？〕
9　10YR5/3 にぶい黄褐色　細～中礫混じり極細砂（淘汰良い。しまり良い。Φ５cm 大の礫を少量含む）〔墳丘盛土〕
10　10YR4/2 灰黄褐色　細礫混じり砂質シルト～極細砂（淘汰やや良い。しまり良い。Φ１～２cm の風化礫をやや多く含む。偏平化したベース土ブロックを部分的に含む）〔墳丘盛土〕
11　2.5Y5/3 黄褐色　砂質シルト（淘汰良い。しまり良い。ベース土ブロックを多く含む）〔墳丘盛土〕
12　10YR4/3 にぶい黄褐色　細～中礫混じり極細砂（淘汰やや良い。しまり良い。ベース土ブロック及び起源不明の N3/ 暗灰色極細砂のブロックを層状に含む）〔墳丘盛土〕
13　10YR5/3 にぶい黄褐色　粗砂混じり砂質シルト（淘汰良い。しまり良い。上半中心にベース土ブロックを層状に含む。炭化物を少量含む）〔墳丘盛土〕
14　2.5Y6/4 にぶい黄色　極細砂（淘汰良い。しまり良い）〔ベース土〕

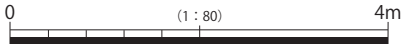


図 13　トレンチ１・２　平・断面図

に、墳丘の盛土にはその粗密の差から、大別して二者があることを断面観察から確認した。具体的には、より墳丘に近い部分で確認した墳丘盛土は極めてしまりが良く、緻密な盛土で墳丘が構築されているが、より外周に近い部分の盛土は全般にしまりが悪く、淘汰の悪い盛土で構築されている。後者の層準については、墳丘盛土の流出土として把握することも可能ではあるが、断面観察の検討を重ねた結果、本来の墳丘盛土として捉え、古墳本来の墳丘裾部が残存している可能性が極めて高いと判断するに至った。

なお、墳丘裾部から約 2.5 m外側に離れた地点では、墳丘盛土に近似した層準が落ち込む状況を確認している。本層準の直上には中近世の瓦片を含む落ち込みが位置しており、層準の大半をこれによって欠いているため、調査当初はこれを撹乱の一部として捉えていたが、その他のトレンチの調査成果を総合して考えると、古墳周溝の一部が残存しているものと捉えることが妥当と判断できる。

なお、トレンチ内からは先述の中近世の瓦片が出土した。細片のため、図示には至っていない。

４．トレンチ３（図 14）

古墳の西部における墳丘裾の位置を確認することを目的として幅 1.5 m、総延長 10.7 mのトレンチを設定した。なお、本トレンチを設定した耳原古墳西側には緩やかなマウンド状の微高地が拡がっている。この微高地は現状低平な周辺地形の中ではとりわけ目立つものとなっており、一見すると古墳のようにも見受けられる状況にあった。そこで、今回の調査では大阪府教育委員会との協議の末、当該微高地が耳原古墳の一部に該当するものか否かを確認するために、トレンチを一部この微高地上まで設定して調査を行うこととした。結果として、古墳西側に展開する微高地はほぼ地山と表土のみから構成されていることを確認するとともに、トレンチのほぼ中央部において耳原古墳の周溝と考えられる落ち込みを確認するに至ったことから、この微高地は耳原古墳とはほぼ関係のないことが明らかとなった。

なお、本トレンチは大部分がガラス片を含む近現代以降の撹乱を受けており、墳丘の盛土及び周溝の識別には非常な困難を伴った。検討を重ねた結果、墳丘盛土については、トレンチの東端付近でかろうじて確認できた墳丘盛土に近似した層準の端部をこれに充て、一方の周溝については、墳丘外側で確認できた深さ約 0.1 mの落ち込みをもってこれに充当させることが妥当と判断した。古墳の墳形が従来知られているように円形を示すという前提に立脚すれば、墳丘裾の想定位置についてはその他のトレンチの成果とも概ね符合することから大過ないものと考えられる。しかしながら、周溝についてはその他のトレンチで確認できたものと比較すると、やや小規模かつ墳丘側に偏位している点は注意が必要である。

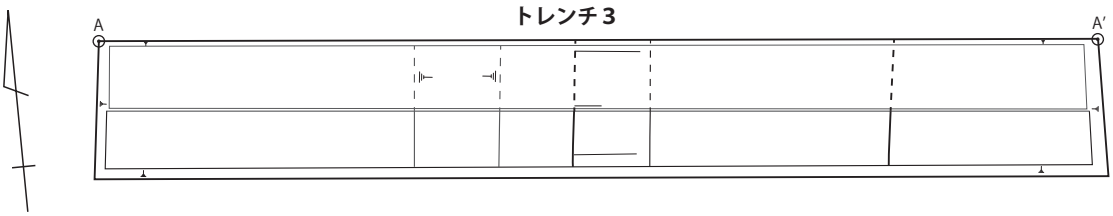
なお、本トレンチにおいては遺物は出土しなかった。

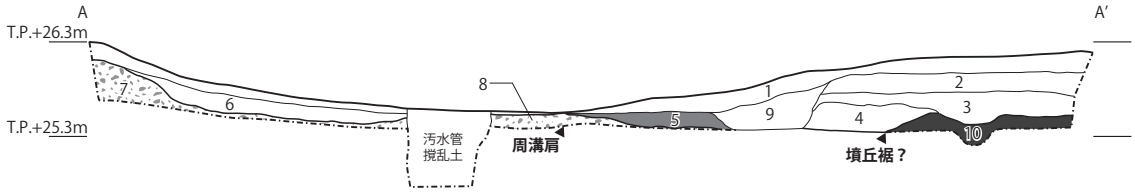
５．トレンチ４（図 14）

古墳の南西部における墳丘裾の位置を確認することを目的として幅 1.5 m、総延長 12.1 mのトレンチを設定した。結果として、墳丘盛土の盛土をトレンチの北東側で確認し、古墳の外側にあたる南西部では周溝埋土の一部と内側の掘方及び中近世の落ち込みを確認することができた。

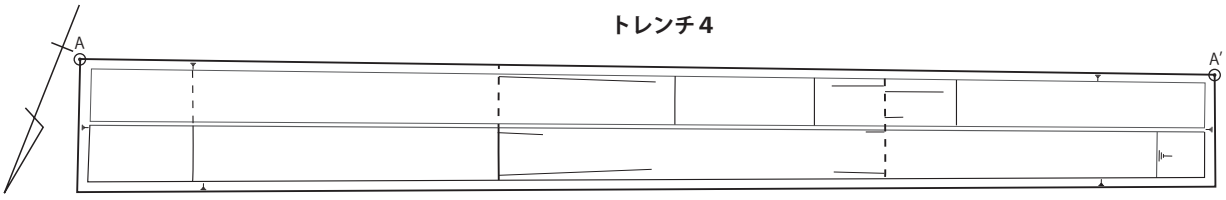
墳丘の盛土はトレンチ２と同様、暗灰～にぶい黄褐色細礫混じり砂質シルトに地山であるにぶい黄色シルトを偽礫状に多数含むものを基調とする。ただし、本トレンチにおいては墳丘裾と考えられる地点から 2.5 mの範囲で盛土に近似した薄層の存在を確認しており、この点においてトレンチ２で確認した墳丘構造とは様相が異なる。この薄層の評価については、断面の観察に努めた結果、極めてしまりが悪いこと、層中に含まれる偽礫の構造が盛土とやや異なること、他トレンチの成果から想定される墳丘裾部の平面的な位置関係などの諸点を総合的に勘案した上で、墳丘盛土の流出の可能性が高いと判断した。

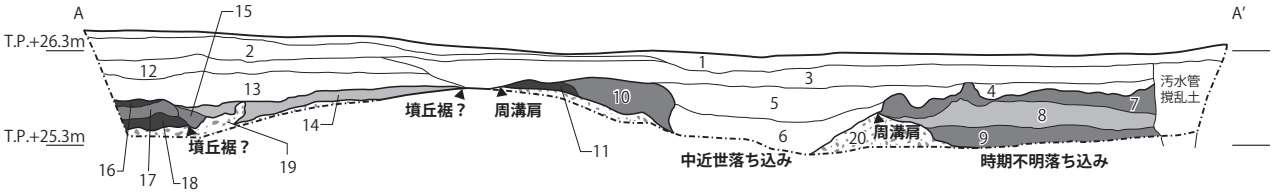
また、古墳の周溝については、上述の墳丘裾部から 2.5 ～ 3.0 m離れた地点において周溝埋土が南西



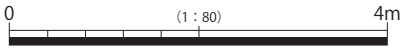


1　N2/ 黒色　砂質シルト〔表土〕
2　5Y8/4 淡黄色　細～中砂〔造成真砂土〕
3　2.5Y5/3 黄褐色　極粗砂～細礫混じり極細砂（炭化物多く含む。瓦・ガラス片を含む）〔現代撹乱土〕
4　10YR6/6 明黄褐色　極粗砂～細礫混じり砂質シルト（淘汰悪い。しまりやや良い。ベース土ブロックを下半にやや多く含む）〔墳丘盛土？〕
5　2.5Y5/3 黄褐色　粗砂混じり砂質シルト（淘汰やや良い。しまり良い。Φ２～３cm 大の礫を少量含む）〔周溝埋土〕
6　2.5Y5/2暗灰黄色　細～中礫混じり極細砂(淘汰悪い。しまり良い。Φ３～５cmの礫を極めて多く含む。部分的に人頭大の礫を少量含む)〔ベース土崩落土？〕
7　10YR4/2 灰黄褐色　細礫混じり極細砂（淘汰やや良い。しまり良い）〔木根撹乱を受けたベース土〕
8　10YR6/4 にぶい黄橙色　砂質シルト～極細砂（淘汰良い。しまり良い。西側は礫を多く含む）〔ベース土〕
9　10YR5/4 にぶい黄褐色　細～中礫混じり極細砂〔現代撹乱土〕
10　10YR6/6 明黄褐色　細礫混じり砂質シルト（淘汰やや良い。。しまり良い。ベース土ブロックをやや多く含む。炭化物少量含む）〔墳丘盛土〕





1　5Y4/1 灰色　粗砂混じり極細砂〔表土〕
2　5Y6/1 灰色　中～粗砂〔造成真砂土〕
3　2.5Y5/2 暗灰黄色　中砂混じり砂質シルト〔造成土〕
4　5Y5/2 灰オリーブ色　細礫混じり極細砂〔造成土〕
5　10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じり砂質シルト（淘汰やや良い。粘性強い。ベース土ブロックをやや多く含む。瓦片を含む）〔中近世落ち込み上層〕
6　2.5Y4/2暗灰黄色　粗砂混じり砂質シルト(淘汰やや良い。上層との境界にΦ10cm程度の礫を多く含む。ベース土ブロックをやや多く含む)〔中近世落ち込み下層〕
7　10YR4/2 灰黄褐色　極粗砂混じり砂質シルト（淘汰良い。しまり良い。Φ２～３cm 大の礫を少量含む）〔時期不明落ち込み上層〕
8　10YR3/2 黒褐色　極粗砂混じり粘質シルト（淘汰良い。しまり非常に良い。Φ５mm 大の礫を少量含む。ベース土ブロックを微量含む）〔時期不明落ち込み中層〕
9　2.5Y4/2 暗灰黄色　中砂混じり砂質シルト（淘汰やや良い。しまりやや悪い。Φ３～５cm 大の礫を少量含む。Φ１～２cm 大のベース土ブロックを少量含む）〔時期不明落ち込み下層〕
10　10YR3/1 黒褐色　細礫混じり砂質シルト（淘汰やや悪い。しまりやや悪い。側方中心にΦ３～５cm 大の礫を少量含む。Φ１～２cm 大のベース土ブロックをやや多く含む）〔周溝埋土〕
11　2.5Y6/3にぶい黄色　細礫混じり砂質シルト(淘汰やや良い。しまりやや良い。Φ１～３cmのベース土ブロックを極めて多く含む。ほぼベース土ブロックで形成）〔周溝埋土〕
12　10YR5/2 灰黄褐色　粗砂混じり砂質シルト〔造成土〕
13　2.5Y5/2 暗灰黄色　粗砂混じり砂質シルト（瓦片を含む。炭化物を多く含む。ベース土ブロックを少量含む）〔撹乱土〕
14　10YR3/2 黒褐色　粗砂混じり極細砂（淘汰やや悪い。しまりやや悪い。Φ１～２cm 大のベース土ブロックを多く含む）〔墳丘盛土？流出土か〕
15　2.5Y6/1 黄灰色　中砂混じり砂質シルト（淘汰やや良い。しまり良い。Φ３～５cm 大のベース土ブロックをやや多く含む）〔墳丘盛土？流出土か〕
16　10YR2/1 黒色　極粗砂混じり粘質シルト～砂質シルト（淘汰やや良い。しまり良い。Φ１～２cm 大の礫を微量含む）〔墳丘盛土〕
17　10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じり砂質シルト（淘汰やや悪い。しまり良い。Φ１～３cm 大のベース土ブロックを極めて多く含む）〔墳丘盛土〕
18　2.5Y3/1 黒褐色　細砂混じり粘質シルト（淘汰やや良い。しまり良い。Φ３～５cm 大のやや大振りなベース土ブロックを微量含む）〔墳丘盛土〕
19　2.5Y6/4 にぶい黄色　砂質シルト（淘汰良い。しまり良い）〔ベース土〕
20　10YR5/6 黄褐色　中礫混じり極細砂～細砂（淘汰悪い。しまり良い）〔ベース土〕



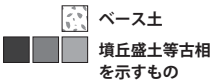


図 14　トレンチ３・４　平・断面図

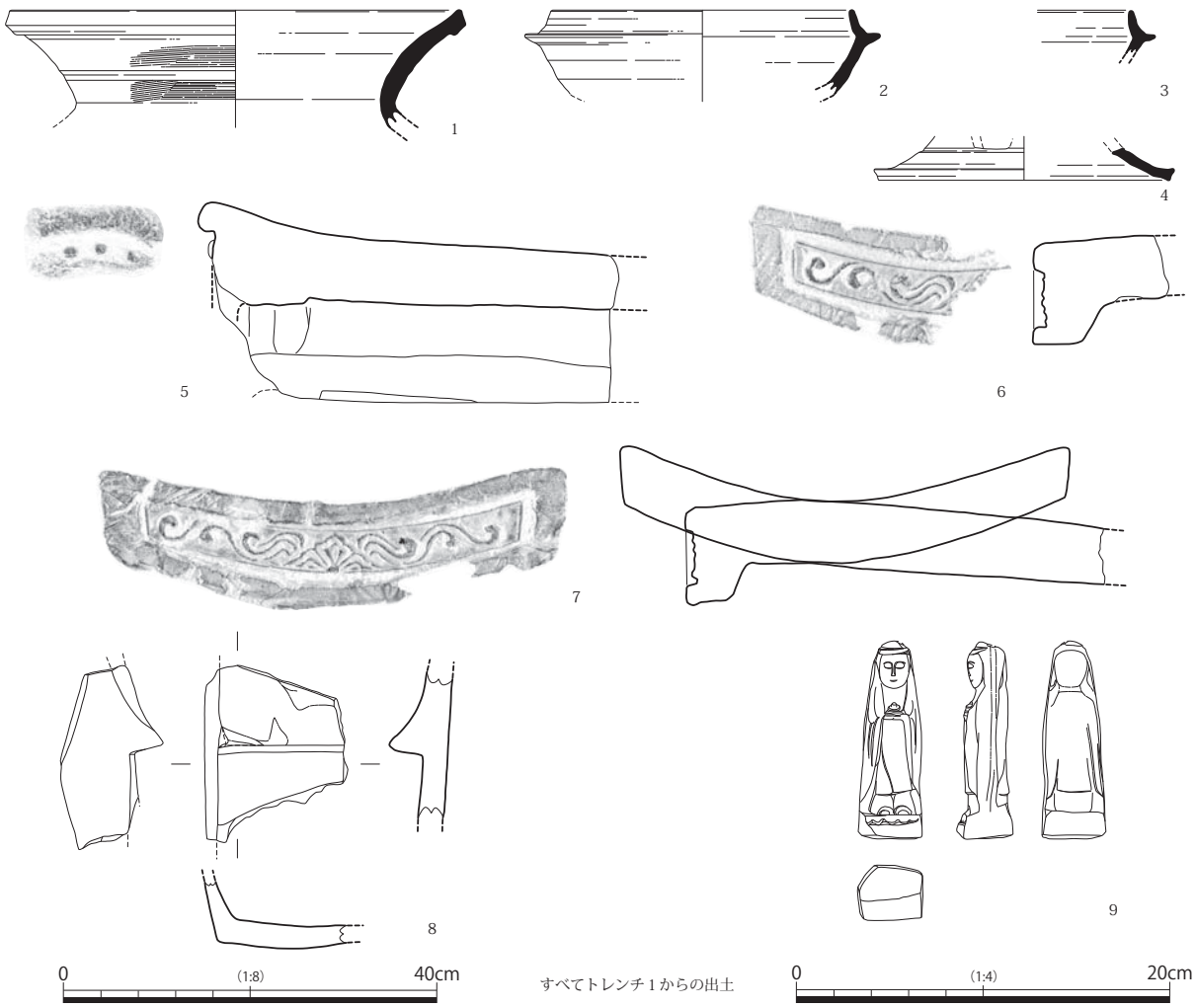


図 15　出土遺物

側に向かって落ち込んでいる様子を確認した。この周溝はトレンチ２と同様、外側の埋土をすべて欠いているが、他のトレンチと比較して中近世の撹乱が小規模であったため、地山層が外側で立ち上がる状況を確認するに至っており、その点で特筆すべき内容を示している。周溝埋土が残存していないために、本来的な規模を示すものではない点は注意が必要であるが、今回確認した撹乱よりも内側に周溝の外側の掘方があったと想定できることから、周溝の本来的な幅は４m以内に収まることが明らかとなった。

本トレンチにおいては２トレンチ同様、中近世の瓦片が出土した。細片のため図示には至っていない。

６．まとめ

以上、各トレンチにおける調査の概要を述べてきた。このように、今回の範囲確認調査では調査が可能であった古墳南西部を中心とする墳丘裾付近にトレンチを設定して調査を行い、従来不明瞭であった本古墳の範囲に関する新たな知見を得ることができた。具体的には、前庭部に設けたトレンチ１を除く３本のトレンチにおいて墳丘盛土及び周溝と考えられる落ち込みを確認するに至っている。中近世の大規模な撹乱を受けているため、周溝の全体像についてはなお検討の余地があるが、古墳外周にこうした溝が巡っていた可能性が高いことが明らかになったことは、今次調査の大きな成果の一つと言えよう。

参考文献

梅原末治 1935「第七　摂津耳原古墳」『近畿地方古墳墓の調査一』１日本古文化研究所報告第一

茨木市教育委員会 1990『わがまち茨木　古墳編』

第４節　千提寺菱ヶ谷遺跡 SDH14-1・15-1（範囲確認調査）

調 査 地　茨木市大字千提寺36－１の一部
（小字菱ヶ谷）
開発事業　史跡指定に向けた範囲確認調査
調査期間　第一次調査
平成26年11月28日～平成27年３月26日
第二次調査
平成27年４月23日～平成27年８月31日
調査面積　第一次調査　約587㎡
第二次調査　約226㎡
調査担当　第一次調査
藤田徹也　坂田典彦　富田卓見
第二次調査　坂田典彦

１．調査に至る経緯と経過

当該地において、「千提寺地区交流拠点広場」の建設が計画され、「土木工事にともなう試掘調査依頼書」が平成 26 年６月 25 日付け（茨教社 14-20 号）で茨木市長より茨木市教育委員会教育長宛で提出された。そこで本市教育委員会は、計画掘削範囲において３本の試掘トレンチを設定し（図１）、平成 26 年９月１日から９月 24 日の期間で試掘調査を行った。結果、20 基を超える遺構を確認したため、翌 10 月に新規発見届を大阪府教育委員会に進達し（茨道第 1686 号）、11 月には「千提寺菱ヶ谷遺跡」として登録された（教委文第 11-13 号）。

これを受けて、本市教育委員会は当該遺跡の保護（保存と活用）を視野に入れ、遺跡の性格の把握に加え、遺跡保存を念頭においた調査方法をもって平成 26 年 11 月 28 日～平成 27 年３月 26 日の期間で第一次確認調査を実施した。結果、最高所に位置する大型土坑の平面規模を確定し、さらに長方形を呈する遺構からは頭骨の一部を検出するに至った。本市教育委員会ではこの成果を受けて、平成 26 年 12 月６日・７日の両日で、地元住民に対して調査成果説明会を開催した。この間、本市教育委員会は大阪府教育委員会文化財保護課および本市文化財保護審議会委員の指導・助言を受けつつ、今後の調査方針を定めていった。

第二次調査は、先の調査で確認した土壙墓と大型土坑の調査をはじめ、範囲確認調査として東斜面（市道千提寺９号線側）、北斜面の土層断面（総延長約 180 m）を確認した。また、試掘南トレンチ南端よりさらに南に遺存する榜示石状の石材に対し、確認トレンチを設定した。平成 27 年７月４日には一般市民に向けた現地説明会を実施し、これまでの調査成果を広く市民に供した。以降、有識者の現地視察に加え、土壌分析の試料採集および頭骨の取上げを行い、８月 31 日をもって第二次調査を終了した。

２．調査の方法と目的

第一次・第二次調査は、当初計画されていた千提寺地区交流拠点広場の建設から、遺跡保護へと方針転換がなされた上での調査であり、開発範囲全体を対象とした調査ではなく、遺跡の範囲確認および性格の把握に主眼をおいた調査方法を採ることとなった。したがって、第一次調査で対象とした遺構は、試掘調査で検出した遺構の内、最高所で検出した大型土坑と、複数ある方形土坑の一つを抽出した。この調査は、両遺構の平面規模や形態・出土品による遺構の時期（年代）を確認し、遺構の一部を掘削することよって全容を把握するという方法で実施し、向後の検証余地を残すべく未発掘部分を残す目的を意識した調査を実施した。

３．調査の成果

①基本層序

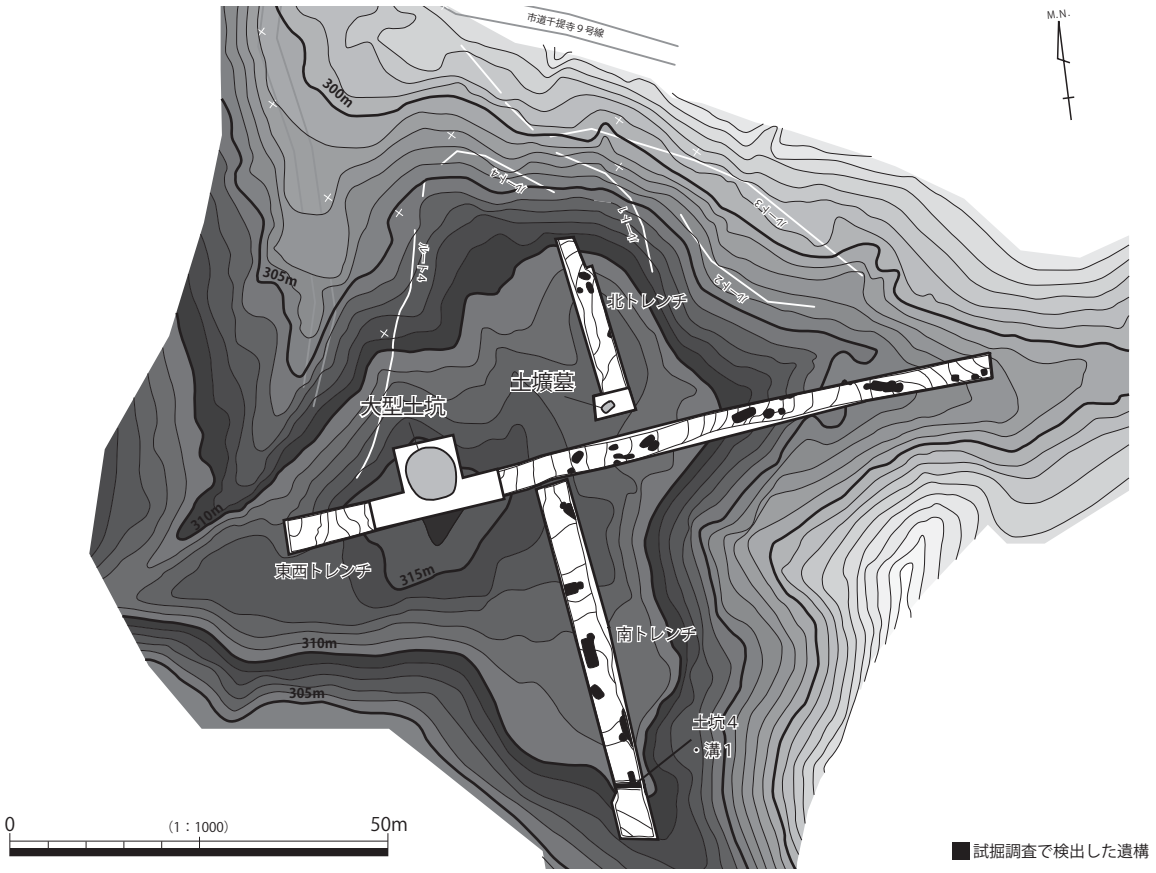


図 16　トレンチ位置図・遺構配置図

本遺跡の地形を俯瞰すると、四角錐形を呈する独立した山地形で、千提寺地区の集落を見下ろす東斜面や南斜面が遺跡（遺構）の分布する範囲となる。図 16 でも分かるように、図上では東西・南北に主尾根が走る菱形を呈しており、尾根と谷が織り成す複雑な地形が看取できる。特に、南西斜面は深い谷地形を呈し、その斜面は急勾配である。このような地形環境の下、試掘調査で設定した３基のトレンチと北東斜面・北西斜面に回らせた範囲確認ルートすべてを対応させて、基本層序とした。

層序は大別で４層に分層でき、現地表面を含む表土・腐植土（１層）、斜面地の表層堆積層・斜面堆積層（２層）、地山（３層、無遺物層）、そして当遺跡の基盤岩（４層、花崗岩体）である。したがって、遺構の帰属層位は３層であり、遺構面は３層上面に当たる。

各層の土色・土質等の詳細は挿図中の註記に委ね、ここでは全体の概要を記載する。まず、今回の調査区では、花崗岩体の上に堆積した３層の上面を遺構面と認定し、当層以下に遺構面が存在しないことを確認している。当然ながら３層は無遺物層であり、基盤岩である４層を母材とした風化花崗岩粒を顕著に含む砂礫を主体とする。３層の特徴としては、１ｍを超える花崗岩巨礫が点在し、斜面の傾斜変換点付近では、礫集積が観察できた（図 17、ルート１）。これら花崗岩巨礫は、本地域における花崗岩節理の性格を示しており、いわゆる「コアストーン」と称される岩体からの抜け落ちである。また、３層の観察結果として、感覚的要素を多分に含み躊躇を覚えるものの積極的に記述するならば、当層の堆積時期は比較的古く、ヒトの痕跡がうかがえない地質年代と考えている。さらに、２層にも共通することであるが、風化花崗岩粒の再堆積層は、透水性が良く、土石流や斜面崩壊等の土砂流出を繰り返す性格を併せ持っている。図 18 に見られる 2b・2b'・2c 層などの谷埋め堆積層は、上記の流出・堆積を繰り返した結果であり、まず３層が大きく流出または浸食され、その凹部を２層が埋めたものと解釈できる。

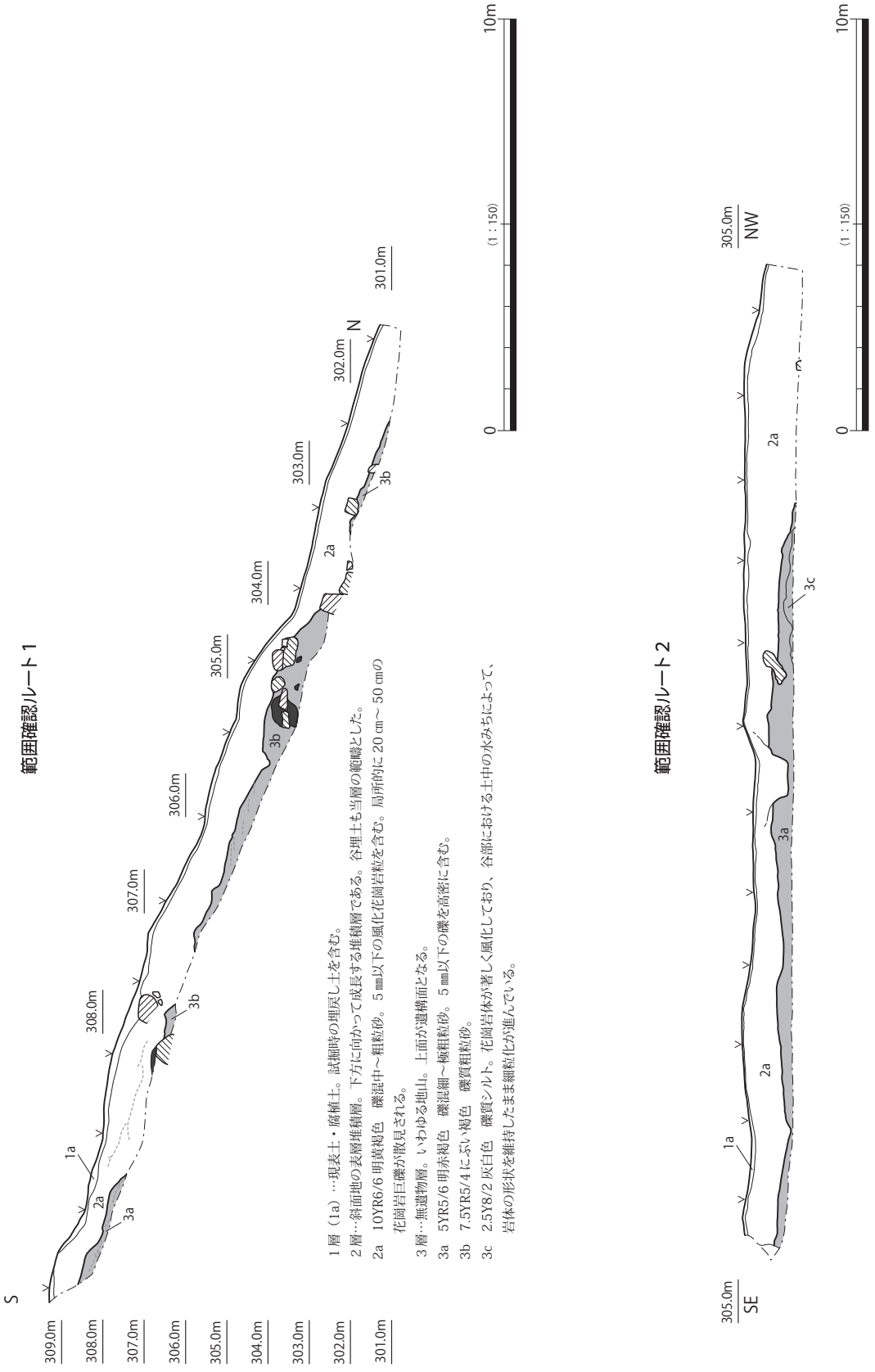


図 17　範囲確認ルート１・２土層断面図

この２層であるが、個々のエリアにおいては調査中に第３層との弁別が困難な場合が多かった。上記してきたように、２層も３層も共に母材を同じくする再堆積層の性格を持っており、いつの段階で堆積したかが分層上の指標となる。２・３層の層理面イコール遺構面であることから、ある一定期間地表面であったことは疑いなく、基本的には土壌化の発達や土質の差異を指標として分層した。２層の性格として、下方に向かって成長していく堆積構造を持ち、微視的に観察すると薄い層が累重する斜面堆積層を構成する。よって、２層の細分土層は 10 層（2a ～ 2k 層）を超えるが、これは３層に対し、比較的短期間での堆積順序の先後関係を示しているにすぎず、現表土を除く遺構面を被覆する層すべてを２層の範疇でとらえた結果である。

現地表面を含む表土・腐植土（１層）についても少し触れておくと、当遺跡は調査前まで共有山として、山林および雑木林のまま自然景観を残していた一画である。管見の限りでは、現在、マツやクヌギなどの植生が見受けられ、周辺では植林や間伐等手入れのゆきとどいたエリアも見られることから、二次林的な様相が色濃く観察される。また、先に述べたように、２・３層は土砂流出の起こりやすい地層であることから、山崩れ後に再生した自然林の可能性も考えられる。しかし、遺跡が機能していた時期の植生は不明瞭であり、遺跡の性格を知る上でも、今後、古環境の復元を視野に入れた調査が不可欠と考える。

なお、各層の堆積時期については、遺物量の僅少さも手伝い非常に粗く記述せざるを得なかった。後述するが、出土した瓦器椀２点は、一つが１層と２層の層理面、もう一つが表採であり、帰属層位が掴めていない。現段階では、土壙墓出土の人骨を放射性炭素年代測定にかけ、逆算していく手法が有効と考える。

追記として、挿図の土層註記で土層名が同一のものは、同一の堆積環境下にあるものと判断している。また、同一層と認められるものでも漸次変異しており、土色・土質に違いが認められるもの、異なる複数の層をセット関係でとらえたものは、アラビア数字の後にアルファベットの小文字を付して細分化した。色調は『新版標準土色帖 2011 年版』と視認色を併用した。

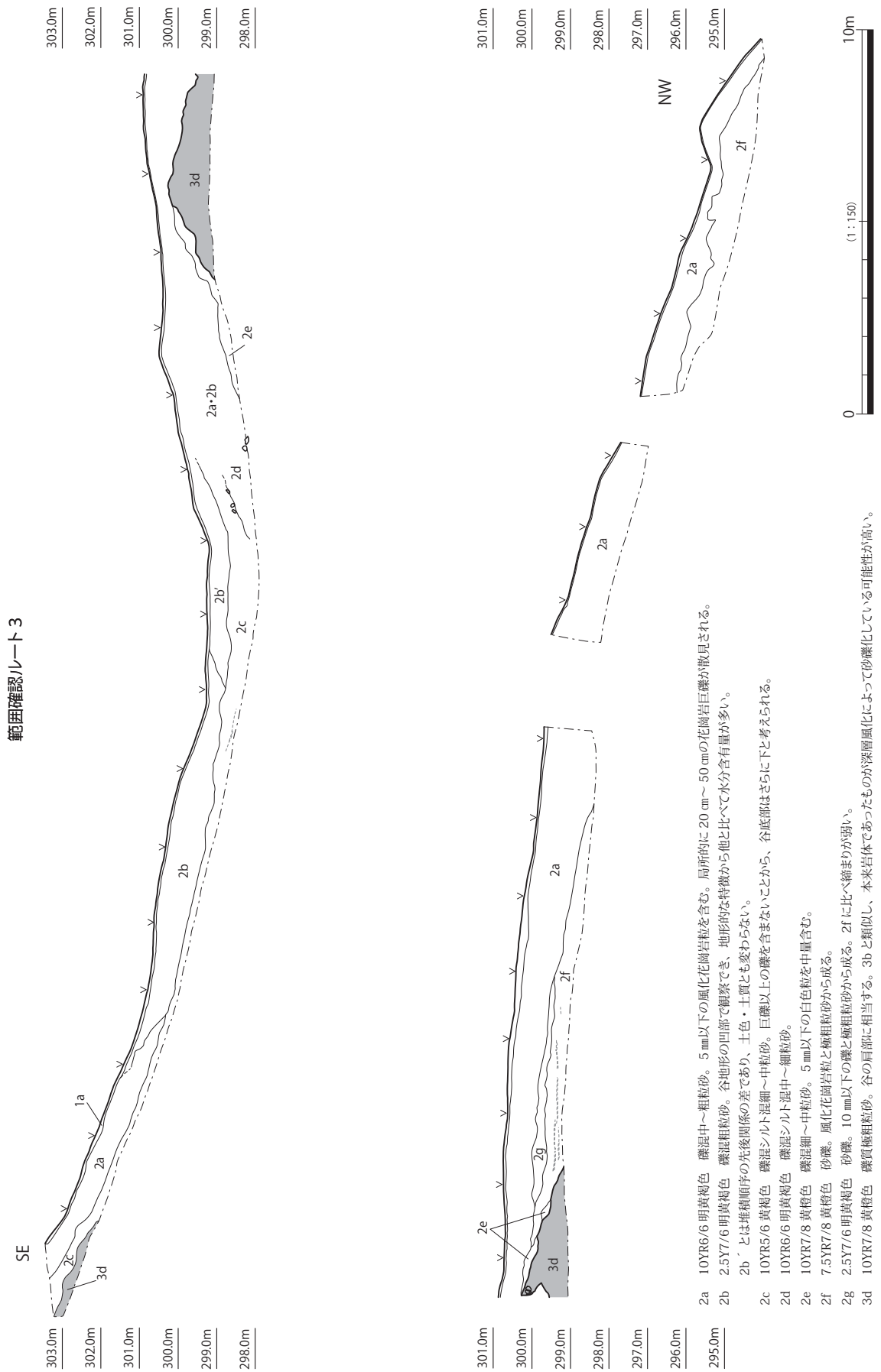
②遺　構

試掘調査と二次に亘る調査で、20 基を超える遺構を確認した。遺構の分布範囲としては、トレンチを設定した範囲すべてと言ってよく、強いて言うなれば東西トレンチ西端では遺構が確認されなかった。ただし、この西端に関しても図 16 で示したように、平坦部分にトレンチが達していないことから、現段階では西側の尾根筋に遺構が分布しない証左にはならない。また、トレンチを設定する際、遺構が構築される可能性が高い尾根頂部を優先して狙ったため、谷部の遺構分布についてはつかめていない。

これまでに確認した遺構の種類は、土坑と溝があり、前者が圧倒的に多い。土坑には、数多くの種類が存在することが推測され、調査を実施した土壙墓と大型土坑の他、今後調査を予定している炭化物をひと際多く含む土坑（東西トレンチ東寄り）や、遺構上面に数十石の割石を置いた土坑、楕円形を呈する土坑、長軸 150㎝大の長方形プランの一端に円形の土坑が接するものなど、平面形態だけをみてもバラエティーに富んでいることが分かる。

また、テラス造成は巨視的にみた遺構面の形成過程ともリンクする重要な遺構と認識しており、掘削調査を行った土坑２基（ＳＫ１・２）、土坑４（ＳＫ４）と溝１（ＳＤ１）に加えて、今回別途記述する。

なお、本遺跡は史跡指定を目指す調査であり、以下に個別遺構を記述する際は、後世の検証のためにも調査過程も含めて詳述する。



2a　10YR6/6 明黄褐色　礫混中～粗粒砂。５㎜以下の風化花崗岩粒を含む。局所的に 20 ㎝～ 50 ㎝の花崗岩巨礫が散見される。
2b　2.5Y7/6 明黄褐色　礫混粗粒砂。谷地形の凹部で観察でき、地形的な特徴から他と比べて水分含有量が多い。
2b´とは堆積順序の先後関係の差であり、土色・土質とも変わらない。
2c　10YR5/6 黄褐色　礫混シルト混細～中粒砂。巨礫以上の礫を含まないことから、谷底部はさらに下と考えられる。
2d　10YR6/6 明黄褐色　礫混シルト混中～細粒砂。
2e　10YR7/8 黄橙色　礫混細～中粒砂。５㎜以下の白色粒を中量含む。
2f　7.5YR7/8 黄橙色　砂礫。風化花崗岩粒と極粗粒砂から成る。
2g　2.5Y7/6 明黄褐色　砂礫。10 ㎜以下の礫と極粗粒砂から成る。2f に比べ締まりが弱い。
3d　10YR7/8 黄橙色　礫質極粗粒砂。谷の肩部に相当する。3b と類似し、本来岩体であったものが深層風化によって砂礫化している可能性が高い。

図 18　範囲確認ルート３土層断面図

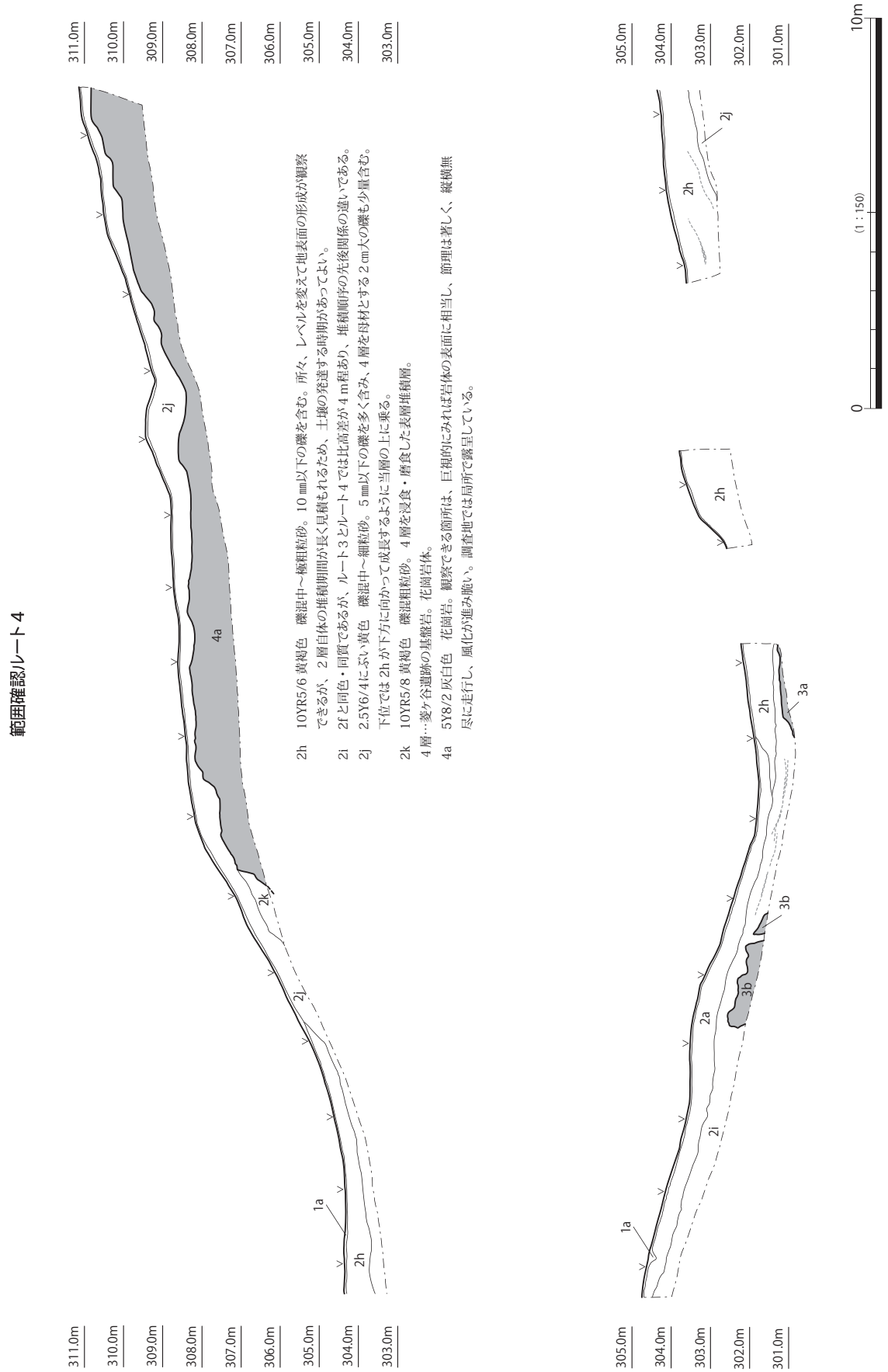


図 19　範囲確認ルート４土層断面図

土壙墓（ＳＫ１、図 20、図版８・９）　当遺構は調査地中央、北トレンチと東西トレンチの交点付近で検出した。検出面の標高はおよそ 310 mを測る。等高線の緩くなった平坦面上に位置し、遺構構築に至る意図的な撰地がうかがわれたため、数ある遺構の中から当遺構を抽出するに至った。まず、試掘調査にて長方形の一角のみを検出し、その大半は調査区外となっていた。そこで、第一次確認調査では、平面プランを確かめられる範囲まで調査区を拡張し、全形をつかんだ時点で遺構を四分割して、南西１/ ４のみを掘削した。この１/ ４を掘削したところ、歯・下顎骨・頭骨を確認したため、図化・写真記録を取って一度埋め戻した。第二次調査では、体制を整え図５のように全体の３/ ４を掘削した。なお、その際は、土壌分析も実施した。

土壙墓の規模は、長辺 165㎝、短辺約 95㎝の長方形を呈し、頭位は南方である。遺構の主軸方位は 21°東偏する。遺構構築面は風化花崗岩粒を高密に含む締まりのよい３層上面から切り込む。細かい数値をみると遺構の検出レベルは西より東の方が 20㎝程低いが、構築当初からこの様に緩い傾斜面であったのかは定かではない。遺構の断面形態は、逆台形ではなく、いわゆる「直掘り」を意識した箱型に掘り下げ、深さは 55㎝～ 70㎝を測る。掘削床の底面はほぼ平坦に仕上げられるものの、頭骨が出土した南側の方が深いことが特徴である。

遺構から出土した人骨は、頭骨および下顎骨･歯（21 本）のみで、掘削土すべてを篩にかけた上でも、首から下の胴体部は、視認でき得る範囲では骨片すら出土しなかった。後頭部が下面に接している出土状況から、埋葬時は顔を上に向けて埋置したと判断できる。また、頭部のみが出土する状況については、

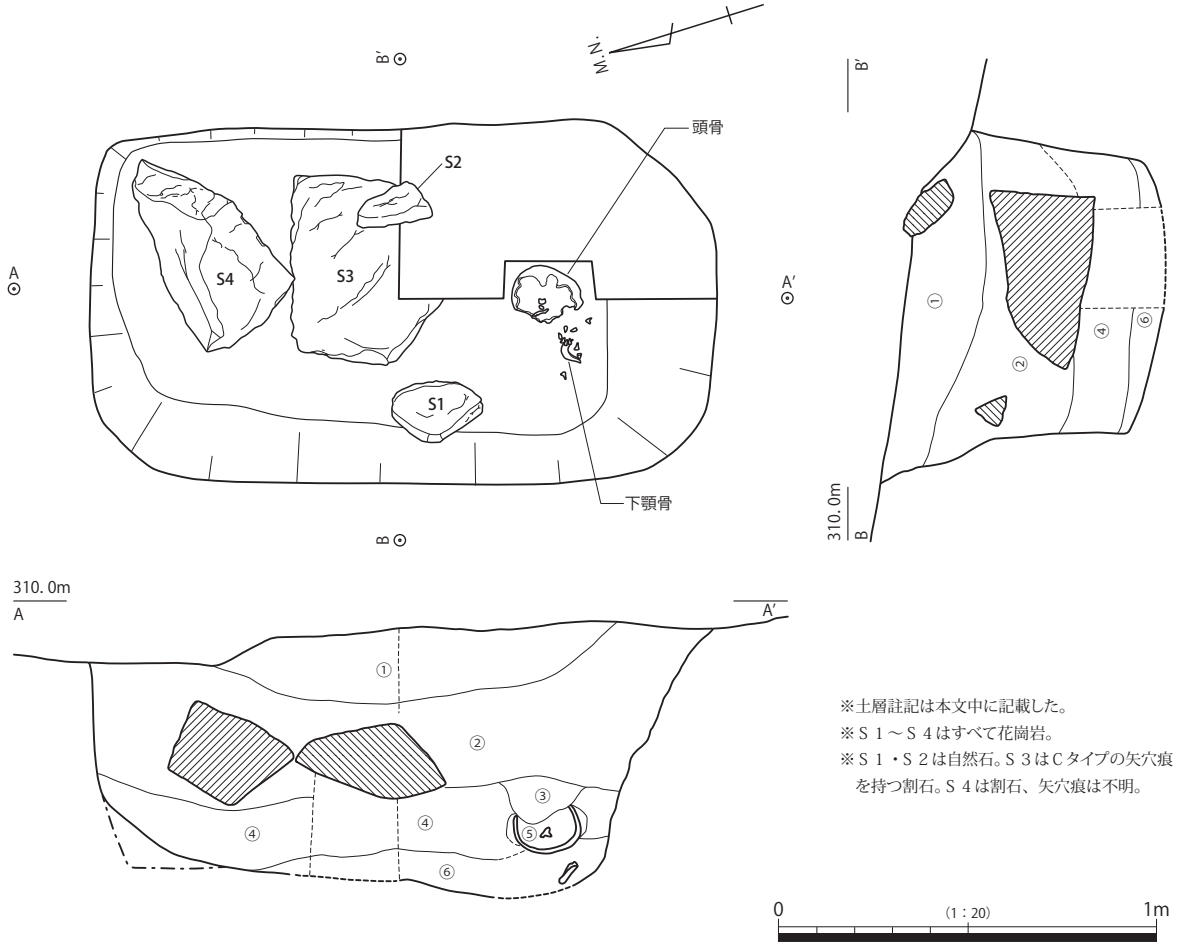


図 20　土坑墓（SK1）平・断面図

以下の３点が考えられる。

Ａ．埋葬当初から、頭部のみを埋葬した。

Ｂ．全身を埋葬したが、後世に胴体部のみを取り出した。

Ｃ．胴体部のみ、時間経過の中で溶けて消滅した。

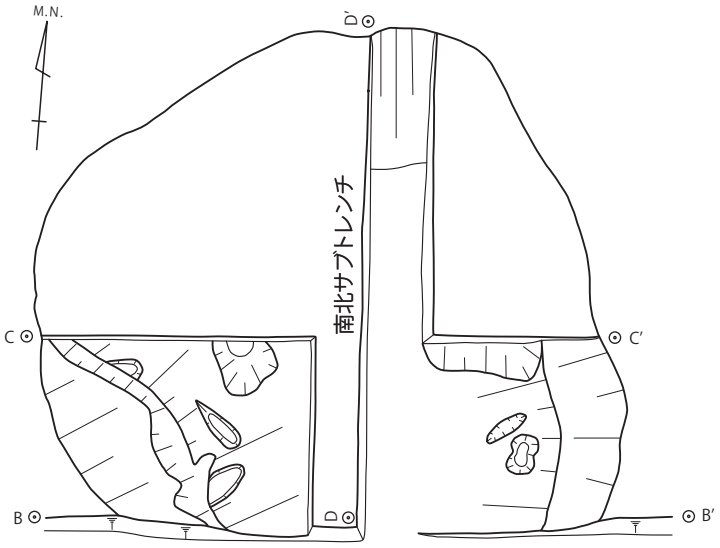
このＡ～Ｃについては、いずれも次のような問題点が残る。Ａの場合は、当初から頭骨のみを埋葬する計画であれば、全身が収まる規模の墓穴を掘る必要はなかったと言える。Ｂは、後世に胴体部の骨を取り出したのであれば、土層断面に再掘削のラインが明確に残るのではないか、という疑問が残る。ただし、出土状況で気になることとして、遺構内に 50㎝大の割石２石（Ｓ３・Ｓ４）と 20㎝大の自然礫２石（Ｓ１・Ｓ２、いずれも花崗岩）が投入されていたことである。透水性の良い埋土であり、この石材の影響で再掘削のラインが不明瞭になっていた可能性も考えられる。なお、これらの石材については後述する。Ｃは、同一遺構内という環境下で大腿骨など比較的遺存率の高い部位まで溶けているにも関わらず、頭骨のみが残る状況に疑問を覚えるが、稀にこのようなケースがあるという指摘を受けている。この点については、自然科学分析等のクロスチェックが有効となろう。当遺構の土壌分析および人骨の非破壊形態分析についての詳細は、本節末「自然科学分析結果の概要」に委ねることとする。

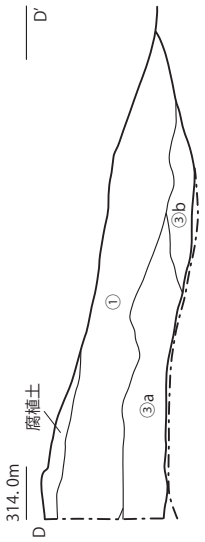
なお、Ｂ・Ｃの全身埋葬の場合、木棺が使用されたか否かであるが、土層観察ではその痕跡は認められなかった。また、棺釘も出土していないことを付記しておく。

遺構埋土について記述する。埋土は６層（①～⑥層）に分層でき、①層は暗灰黄色粗粒砂で、最終埋土もしくは遺構の窪みに溜まったもので基本層序第２層に相当する可能性も考えられる。②層はにぶい黄色極粗粒砂で、５㎜以下の礫を含む。当層が本来の最終埋土になる可能性が高く、遺構内に投入された割石は当層に帰属する。③層は頭骨の上位で観察でき、やや粘性を帯びる黄褐色粗粒砂である。本来②④層であったものが、人骨や油脂等の影響を受けて変異したとも考えられる。④層はにぶい黄色粗粒砂で、全身埋葬があったと想定するならば、初期埋土である。⑤層は③層と同様に頭骨周辺で観察されたもので、黄灰色の粘性を帯びる中粒砂である。⑥層は暗灰黄色粗粒砂で、床面の置土である。頭骨は当層上面に埋置されている。

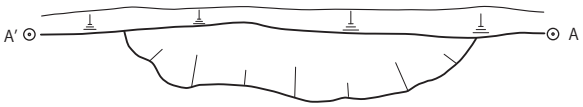
最後に埋土に遺存していた石材について記述しておく。まず、Ｓ１とＳ２は小ぶりな自然石であり、①層に帰属することから土壙墓の埋積過程に意味をもつものではないと判断する。Ｓ３・Ｓ４は 50㎝大の割石で、前者は取上げると遺構を全掘することになるため、遺構内に残留させた。割面を下に向けた状態で出土したため、矢穴の有無は確認できていない。Ｓ４は、20㎝× 25㎝× 59㎝のサンドウィッチ形を呈する略五面体である（図版９）。その内、２面にＣタイプの矢穴痕が３個観察できる。矢穴の断面形状は逆台形で、幅は平均で 5.7㎝、深さは３㎝弱、矢穴間隔は 9.5㎝である。墓碑等の機能があったのかもしれないが、実態は不明である。今後の調査で事例が増えることを望みたい。また、Ｃタイプの矢穴痕は、近世中頃以降の割石技術と目されているが〔芦屋市教育委員会 2005、森岡・藤川 2008 など〕、当石材がどの段階で遺構内に入ったのかが不明瞭であり、この年代観をストレートに遺構の年代に結び付けるのは躊躇する。現在、人骨の年代測定を実施している最中であり、その結果を待って再考したい。

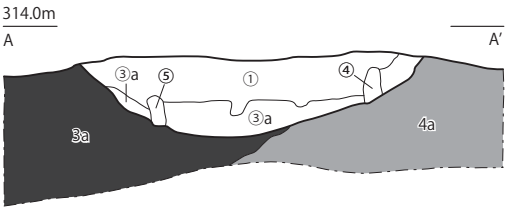
大型土坑（ＳＫ２、図 21、図版 10）　当遺構は、調査地の最高所で検出した。標高は 314 ｍを測り、東西トレンチのやや西寄りに位置する。試掘調査の東西トレンチが遺構の南端に掛かり、最高所に立地し、明瞭な掘方を持つことから一次・二次調査で再度調査することとなった。まず、一次調査では遺構

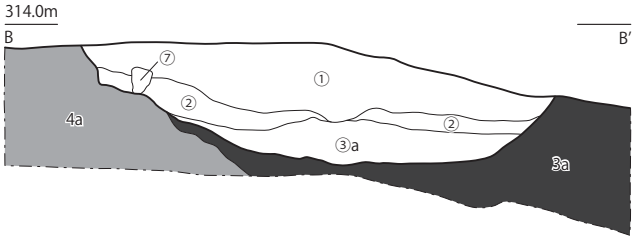


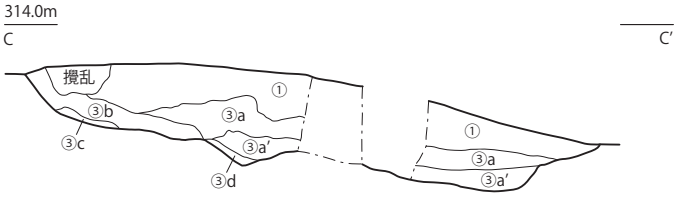


試掘東西トレンチ









① 2.5Y5/3 黄褐色　粗粒砂
② 10YR6/2 灰黄褐色　極粗粒砂～細礫
③a 2.5Y6/1 黄灰色　細礫
③b 2.5Y6/3 にぶい黄色　細礫～細粒砂
③c 2.5Y8/2 灰白色　泥質粗粒砂
③d 10YR5/4 にぶい黄褐色　砂礫混泥
④ 2.5Y6/2 灰黄色　中粒砂
⑤ 10YR6/2 にぶい黄橙色　中～粗粒砂
⑥ 2.5Y7/3 浅黄色　中粒砂
⑦ 10YR6/2 灰黄褐色　中～粗粒砂

基本層序 3a 層。明赤褐色礫混細～極粗粒砂。

基本層序 4a 層。花崗岩体。

0　(1:50)　2m

図 21　大型土坑（SK2）平・断面図

の全形を確認するためにトレンチを拡張し、二次調査では遺構掘方の形状を確かめるため試掘トレンチに直交するように南北サブトレンチを設定し、加えて東西トレンチに沿った形で北側に幅１ｍを目安としたトレンチを設定した。

遺構は南北に長軸を持つ長楕円形を呈し、具体的な規模は南北 4.8 ｍ、東西 3.9 ｍである。断面形はボウル形で、深さは最深部で 70㎝を測る。

遺構埋土は大別で３層（①～③層）に分層でき、④～⑦層は試掘トレンチの壁面で観察できた局所的な堆積土である。特に、Ａ―Ａ'断面の④・⑤・⑦層に関しては木質遺物が置換した木棺痕跡の可能性も考えられたが、結果的には後世の杭痕もしくは動植物による攪乱痕跡と判断した。以下に土層の観察記録を列挙する。①層は最終埋土で、黄褐色粗粒砂５㎜以下の礫を多く含む。②層は遺構の南半部で観察できた灰黄褐色極粗粒砂～細礫層で、遺構が半分ほど埋まった段階で溜まった自然堆積層である。③層は、遺構掘削直後の初期埋土である。鉄分沈着ラインが 0.5㎝～１㎝の間隔で、遺構底面の傾斜に沿って幾層も観察できた。これは、遺構掘削直後すぐに埋めたものではなく、ある一定期間開放状態であったことが分かる。③層は複数層に細分したが、基本的には先の開放状態下での自然堆積層を詳細に分層した結果である。また、特記すべきこととして、③層下面には微細な炭化物が認められた。拡張した底面部の調査では被熱痕跡や炭化物の著しい集積は認められなかった。

出土遺物は、腐植土直下で土師質焼成の土器細片１点が出土しているが、残存率があまりに低く詳細は不明である。当遺構も掘削土すべてを篩にかけたが、先の１点以外は出土していない。

遺構の性格として、穴を掘った状態で機能していたことは埋土の観察から分かっているが、何を意図したものかは不明である。推測の域を出ないが、他の調査区で土壙墓が検出されていることから、墓域内でのモニュメント的な建造物があったとも想定できる。また、送葬儀礼で使用した供養品の焼き場とも考えられるが、埋土最下層で検出した炭化物はあまりに少量で、遺構内での継続的な火の使用は考え難い。よって、当遺構の性格は、周辺の遺構を面的に把握した上で追求していく必要があり、現段階では保留としておく。

土坑４・溝１（ＳＫ４・ＳＤ１、図 22、図版 11）　試掘南トレンチ南端付近で検出した。土坑４と溝１は切り合い関係がある。攪乱によって両者の先後関係は不明であるが、攪乱の壁面で観察すると、溝１が新しいと推察される。土坑４は、南北に長辺を持つ隅円方形を呈し、残存長は 90㎝、幅 70㎝を測り、深さは 30㎝以上（攪乱の壁面で計測）である。遺構掘削を行っていないため、性格を把握するにはデータが不十分であるが、平面形が隅円方形を呈することから墓壙を想定してもよい。溝１は東西方向に走行し、等高線に並行することから人為的な溝であることは疑いない。遺構の性格は、テラス段差上端部に位置することから遺構分布の視点から見た境界溝の役割が与えられよう。

テラス造成（図版 11）　標高 315.9 ｍの最高所を遺跡西寄りに持つ山地斜面上に立地する当遺跡には、東に派生する主尾根（試掘東西トレンチ）と、標高 310 ｍ付近から北と南に派生する微支尾根（試掘北トレンチ・南トレンチ）が存在する。これら尾根筋には一定間隔でテラス面が形成されていることが確認できた。特に、南トレンチでは遺構検出面とテラス造成面が一致することから、両行為に時期差はさほどなかったことが推測される。テラス造成は、個々の遺構を構築する前段階に、この土地を最初に利用しようとした人たちが目的意識を一つにして計画的に実施した一大地業であり、その規模や推測される労力から家族単位ではなく、共同体的な紐帯のなかで組織立って実施されたものと思われる。

③遺物（図 22）

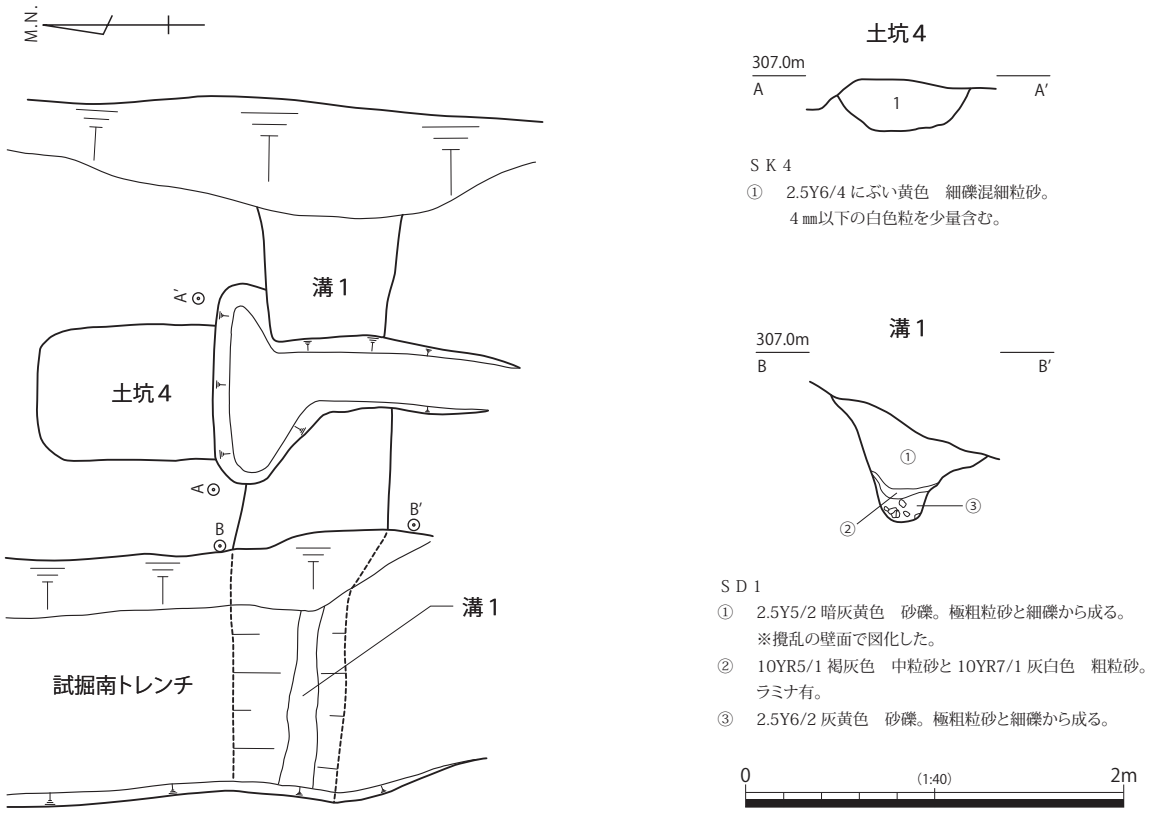


図 22　土坑４（SK4）・溝１（SD1）平・断面図

今回出土した遺物は、Ｃタイプの矢穴痕をもつ割石、土師質焼成の土器、図化できた２点の瓦器椀である。なお、人骨はここで取り扱う遺物とは扱いを別にする。

１・２の２点の瓦器椀は、いずれも和泉型である。１は内面の圏線ミガキが残存部に僅かに観察できる。２は、平行もしくは格子の見込み暗文の一部が観察できる。胎土は１㎜以下の細礫を極少量含むものの、水簸されたきめ細かい粘土を使用している。炭素吸着の良し悪しは、残存率の低さと器肌の磨滅により不明である。13 世紀前半以降のⅢ－３期～Ⅳ－１期に比定されよう。

４．まとめと今後の課題

ここでは調査の成果に若干の推察を踏まえ、列挙することでまとめに代えたい。

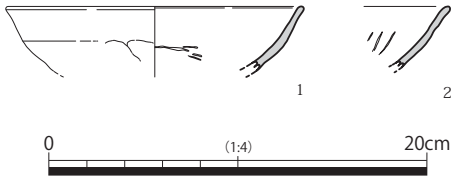
当遺跡が発見されてまだ若い遺跡であることは、これまでに述べてきたとおりであるが、現在、試掘調査で確認した 20 基を超える遺構のうち、わずか３基の調査を実施した段階であり、遺跡の性格や分布範囲は不分明な部分が多い。人骨が出土した土壙墓は、長方形という平面形状からキリシタン墓の可能性が指摘されているが、報文中ではあえて触れなかった。現段階ではその証左と成り得る遺物は皆無である。勿論、周辺の地理的・歴史的環境からみれば、本遺跡の立地する千提寺地区は「隠れキリシタンの里」として衆目の一致するところであり、且つ、キリシタン関係の現有史料等（マリア十五玄義図・聖フランシスコ・ザビエル像など）の文化財も豊富に確認されている〔茨木市教育委員会 2000〕。

しかし、埋蔵文化財の視点では、「キリシタン遺跡」と積極的に評価する要素は、現段階では希薄である。ただしこれは、第２次調査を終えた状況での見識であって、今後調査を積み重ね、遺構単体の性格把握からもう一歩進んだ、遺構群や尾根全体の様相把握ができ得るまで調査が進捗すれば、自ずと繋がっていくものと考える。

遺跡の帰属する時期もまた不明と言わざるを得ない。出土遺物に瓦器椀があるが、いずれも、表採や

１層からの出土であり、個々の遺構の時期を直接的に示すものではない。しかし、当該地に客土はなく、これらの土器が混入する要因が無いことから、少なくとも遺物が示す中世段階には、人々がこの地に踏み入っていたことは明白である。一方で、この土器をもってテラス造成の開始時期を示すと考えるには早計であろう。土壙墓に投入されていた矢穴痕をもつ割石についても、矢穴形態からおおよその時期を示すことが可能であるが、その石材がどの段階で土壙墓に入ったのかは、吟味しなければならない。すなわち、石材が何の目的で割られたのか、そしてどのような経緯で土壙墓に入ったのかは、予定している他の遺構の事例も考慮して慎重に判断していかなければならない。

今後の課題としては、遺跡がもつポテンシャルの高さを鑑み、目的意識をもった発掘調査に加え、北部地域全体を視野に入れたまちづくり資源としても活用できるよう、多角的な記録保存（映像記録等を含む）を心掛けなければならない。そのためにも、まず、地域住民の理解を得ながら、遺跡の保存と活用について考えていく必要がある。



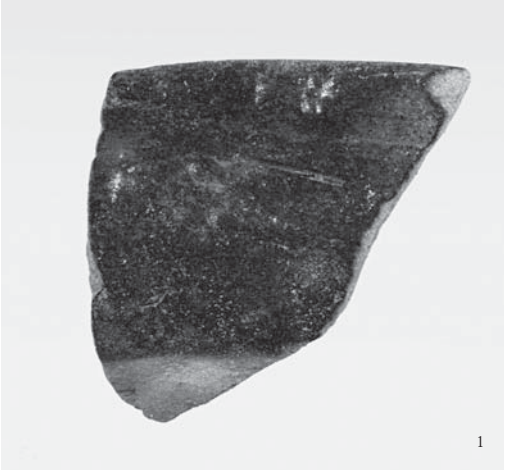


図 23　出土遺物実測図・遺物写真

主要引用参照文献

芦屋市教育委員会 2005『岩ヶ平石切丁場跡』＜芦屋市文化財調査報告第 60 集＞

秋山邦雄 2012「Ⅳ．２　遺跡の役割と活用の視点」『観光考古学』＜考古学ハンドブック７＞

池田　碩 1998『花崗岩地形の世界』古今書院

井藤暁子 2010「茨木キリシタン遺跡発見 90 周年－茨木キリシタン遺跡の成立に関わる「フロイス日本史」清水寺ロケの実像－」『坪井清足先生卒寿記念論文集－埋文行政と研究のはざまで－』

茨木市教育委員会 2000『千提寺・下音羽のキリシタン遺跡』復刻

今野春樹 2014『キリシタン考古学－キリシタン遺跡を掘る－』＜考古学調査ハンドブック８＞

公益財団法人　大阪府文化財センター 2014『発掘！検証！キリシタン墓－高山右近とキリシタン－』

公益財団法人　大阪府文化財センター 2015『千提寺西遺跡・日奈戸遺跡・千提寺市阪遺跡・千提寺クルス山遺跡』＜大阪府文化財センター調査報告書第 256 号＞

高槻市教育委員会 2001『高槻城キリシタン墓地－三ノ丸北郭地区発掘調査報告書』

田中裕介 2012「キリシタン墓地の構造」『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会　研究発表資料集』

田中裕介 2014「日本のキリシタン墓研究の現状」『臼杵史談』＜ 104 号＞

谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』

森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」『古代学研究－森浩一先生傘寿記念論文集－』＜第 180 号＞

自然科学分析結果の概要

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 分析の概要

遺構内から骨が検出された土坑の SK1 で実施した骨同定、微細物分析、全リン酸分析、脂肪酸分析の自然科学分析結果の概要を述べる。

全リン酸分析、脂肪酸分析は、土坑内の動物遺存体の分布状況に関する知見を得るために実施された。リン酸量は、骨が残存する部分ないしその直下で相対的に値が高いことが確認された。それ以外の場所では、1 ヶ所を除き極めて低い値を示した。脂肪酸分析は、ほぼ脂質が検出されない状況であった。土坑の埋土が水はけの良い粗粒な堆積物で構成されていることから、遺構内のリン酸、脂肪酸は溶脱したと考えられる。よって、これらの分析値からは、土坑内での動物遺存体の分布を検討することは不可能と判断された。なお、対象試料として分析を行った SK2 では、骨部分以外の SK1 埋土と同様にリン酸、脂肪酸とも検出状況が極めて不良であった。

微細物分析では、SK1 の埋土を粒径 0.5mm の篩で水洗別を行っている。分析結果、微細な遺物や骨片等は検出されなかった。埋土については、遺構埋土の全容積のかなりの量を洗浄している。よって、分析結果からは、遺構掘削時に微細な考古遺物や人骨片を見落とした可能性が低いことが指摘される。

骨の同定では、遺構内から取り上げられた動物遺存体についての同定結果が得られたので、次節でその詳細を示す。

2. 骨同定

(1) 分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。また、歯牙の計測は、藤田（1949）に基づき、デジタルノギスを使用して計測する。なお、年齢に関しては、幼児が 1 ～ 5 歳程度、小児が 6 ～ 15 歳程度、成人が 16 歳程度以上、成年が 16 ～ 20 歳程度、壮年が 20 ～ 39 歳程度、熟年が 40 ～ 59 歳程度、老年が 60 歳以上を表す。

(2) 同定結果

同定結果を表 1、歯式を表 2、歯牙計測値を表 3 に示す。SK1 は、部位が確認できた骨がいずれもヒトであり、特徴的な部位がみられない骨片もおそらくはヒトに由来するとみられる。

確認できた部位は、脳頭蓋（前頭骨・左右頭頂骨・後頭骨）の破片、右側頭骨、下顎骨、左上顎犬歯、左上顎第 1 小臼歯、左上顎第 2 小臼歯、左上顎第 1 大臼歯、右上顎第 2 切歯、右上顎第 1 小臼歯、右上顎第 1 大臼歯、右上顎第 2 大臼歯、右上顎第 3 大臼歯、左下顎第 1 切歯、左下顎第 2 切歯、左下顎犬歯、左下顎第 1 小臼歯、左下顎第 2 小臼歯、右下顎第 1 切歯、右下顎第 2 切歯、右下顎犬歯、右下顎第 1 小臼歯、右下顎第 2 小臼歯、右下顎第 1 大臼歯などである。

(3) 考察

SK1 で出土した骨は、いずれもヒトに由来する。重なる部位がみられないことから、埋葬者は 1 個体と考えられる。

歯牙計測値が權田（1959）と比較すると男性的である。また、外後頭骨隆起が観察できないものの、内後頭骨隆起はやや発達で、眉上隆起も若干発達している。これらのことから、本人骨は男性の可能性が指摘される。

年齢は、冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合の主要 3 縫合とも、外側が閉じてないが、内側が閉じて

いることから、熟年以降と考えられる。ただし、年齢の割には歯牙の咬耗が少なく、大臼歯において象牙質が露出していない。また、歯牙にエナメル質減形成がみられる。これらのことから、長期間、柔らかいものを食していたとみられ、栄養状態が悪かった可能性がある。また、脳頭蓋の後頭骨外側および前頭骨内側に炎症性の変化（写真 1c）が観察されることから、何らかの疾病を患っていた可能性もある。

引用文献

權田和良 1959「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』第 67 巻

藤田恒太郎 1949「歯の計測基準について」『人類学雑誌』第 61 巻

表１　骨同定結果

遺構	試料名	採取位置	地区	種類	部位	左 右	部分	数量	備考
SK1	頭骨			ヒト	脳頭蓋骨		破片	1	
					側頭骨	右	破片	1	
					頭蓋骨		破片	2	
	アゴ	南西1/4部分	北トレンチ	ヒト	下顎骨		破片	1	GL-60cm(T.P=309.245)
	骨①	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	側頭骨	右	錐体部	1	GL-48cm(T.P=309.360m)
	骨②	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト?	不明		破片	1	GL-50cm(T.P=309.363m)
	骨③	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト?	不明		破片	1	GL-52cm(T.P=309.347m)
	骨④	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト?	不明		破片	1	GL-53.5cm(T.P=309.304m)
	歯①	南西1/4部分	北トレンチ	ヒト	下顎第2小臼歯	右	ほぼ完存	1	GL-60cm(T.P=309.263m)
	歯②	南西1/4部分	北トレンチ	ヒト	下顎第1大臼歯	右	ほぼ完存	1	GL-60cm(T.P=309.263m)
	歯③	南西1/4部分	北トレンチ	ヒト	下顎第1小臼歯	右	ほぼ完存	1	GL-60～70cm間
	歯④	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	下顎犬歯	右	ほぼ完存	1	GL-64cm(T.P=　　m)
	歯⑤	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	上顎第1大臼歯	右	破片	1	GL-　cm(T.P=309.379m)
	歯⑥a	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	上顎第2小臼歯	左	ほぼ完存	1	GL-52cm(T.P=309.330m)
	歯⑥b	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	上顎第1小臼歯	左	ほぼ完存	1	GL-52cm(T.P=309.330m)
	歯⑦	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	上顎第1大臼歯	左	ほぼ完存	1	GL-53cm(T.P=309.327m)
	歯⑧	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	上顎犬歯	左	ほぼ完存	1	GL-50～60cm
	歯⑨	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	下顎第2小臼歯	左	ほぼ完存	1	GL-61.5cm(T.P=309.226m)
	歯⑩	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	下顎第1小臼歯	左	ほぼ完存	1	GL-58cm(T.P+309.262m)
	歯⑪	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	下顎犬歯	左	ほぼ完存	1	GL-59cm(T.P+309.257m)
	歯⑫	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	下顎第2切歯	左	破片	1	GL-59cm(T.P+309.254m)
	歯⑬	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	下顎第1切歯	左	ほぼ完存	1	GL-59.5cm(T.P+309.243m)
	歯⑭	南西1/4軸部分	北トレンチ	ヒト	上顎第1小臼歯	右	破片	1	GL-70～床面
		南西1/4平面?		ヒト	上顎第2大臼歯	右	破片	1	GL-40～50cm
				ヒト	上顎第3大臼歯	右	破片	1	
		南西1/4軸部分	南北軸拡張	ヒト	上顎第2切歯	右	破片	1	GL-60～70cm
				ヒト	下顎第1切歯	右	ほぼ完存	1	
				ヒト?	不明		破片	1	
	頭骨より下	南西1/4軸部分		ヒト	下顎第2切歯	右	ほぼ完存	1	GL-70cm以下

表２　SK1 の歯式

SK1	右								左							
上顎	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
	○	○	○		○		○				○	○	○	○		
下顎	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3
			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			

凡例）　○：遊離　　Ｉ：切歯　　Ｃ：犬歯　　Ｐ：小臼歯　　Ｍ：大臼歯

表３　歯牙計測値

単位；mm

			歯冠幅 右	歯冠幅 左	歯冠厚 右	歯冠厚 左
上顎	第1切歯	Ｉ１				
	第2切歯	Ｉ２	8.28		6.4±	
	犬歯	Ｃ		7.55		7.97
	第1小臼歯	Ｐ１	8.01	7.83	10.39	10.66
	第2小臼歯	Ｐ２		7.31		10.52
	第1大臼歯	Ｍ１	12.04	12.22	12.44	12.31
	第2大臼歯	Ｍ２	11.49		12.62	
	第3大臼歯	Ｍ３	10.98		11.33	
下顎	第1切歯	Ｉ１	5.66	5.56	6.69	6.21
	第2切歯	Ｉ２	5.95	6.12	6.37	6.58
	犬歯	Ｃ	6.99	6.95	8.17	8.32
	第1小臼歯	Ｐ１	8.02	7.66	8.73	8.72
	第2小臼歯	Ｐ２	8.47	7.94	9.99	9.24
	第1大臼歯	Ｍ１	12.79		11.36	
	第2大臼歯	Ｍ２				
	第3大臼歯	Ｍ３				

注）　空欄：未検出

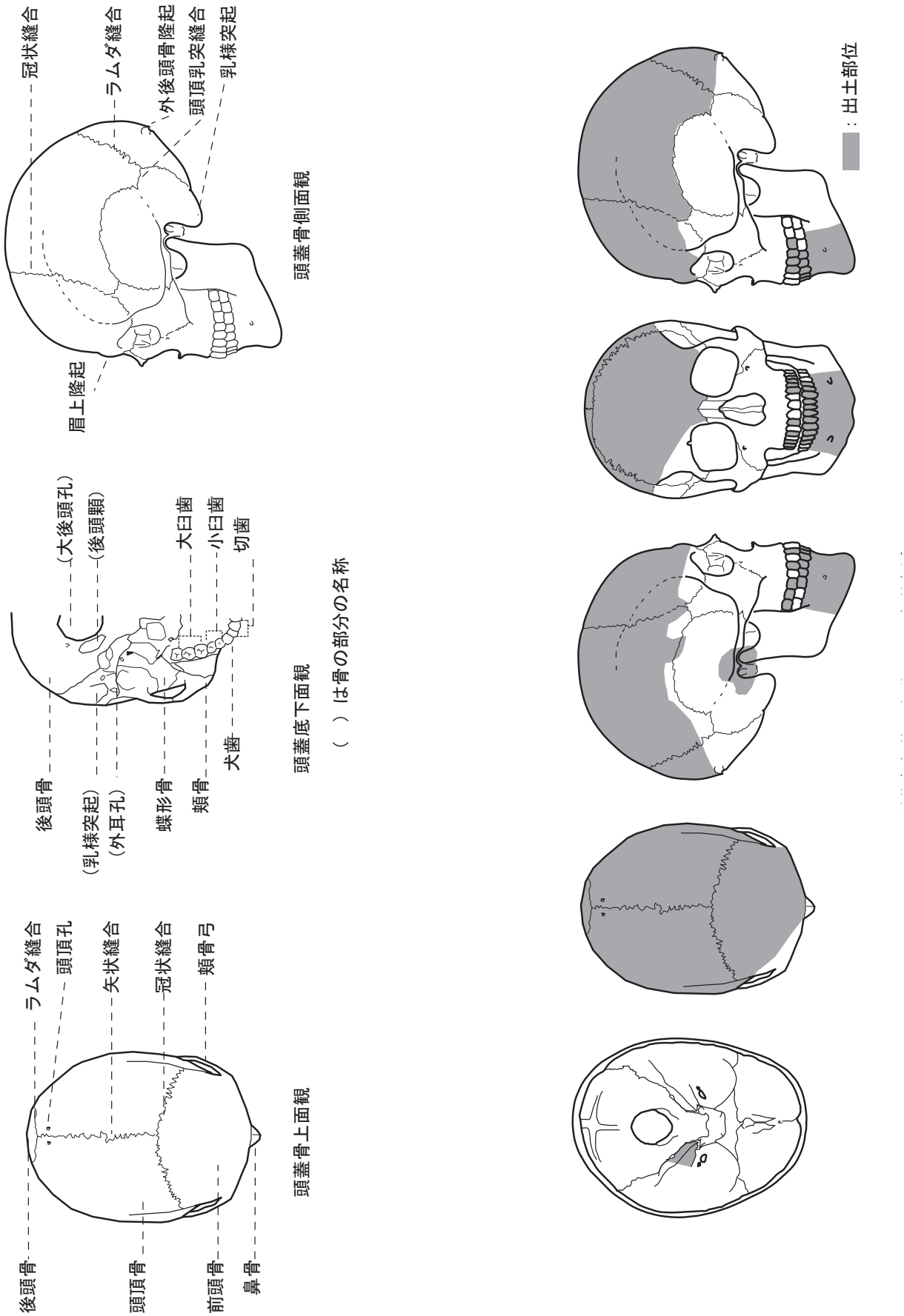
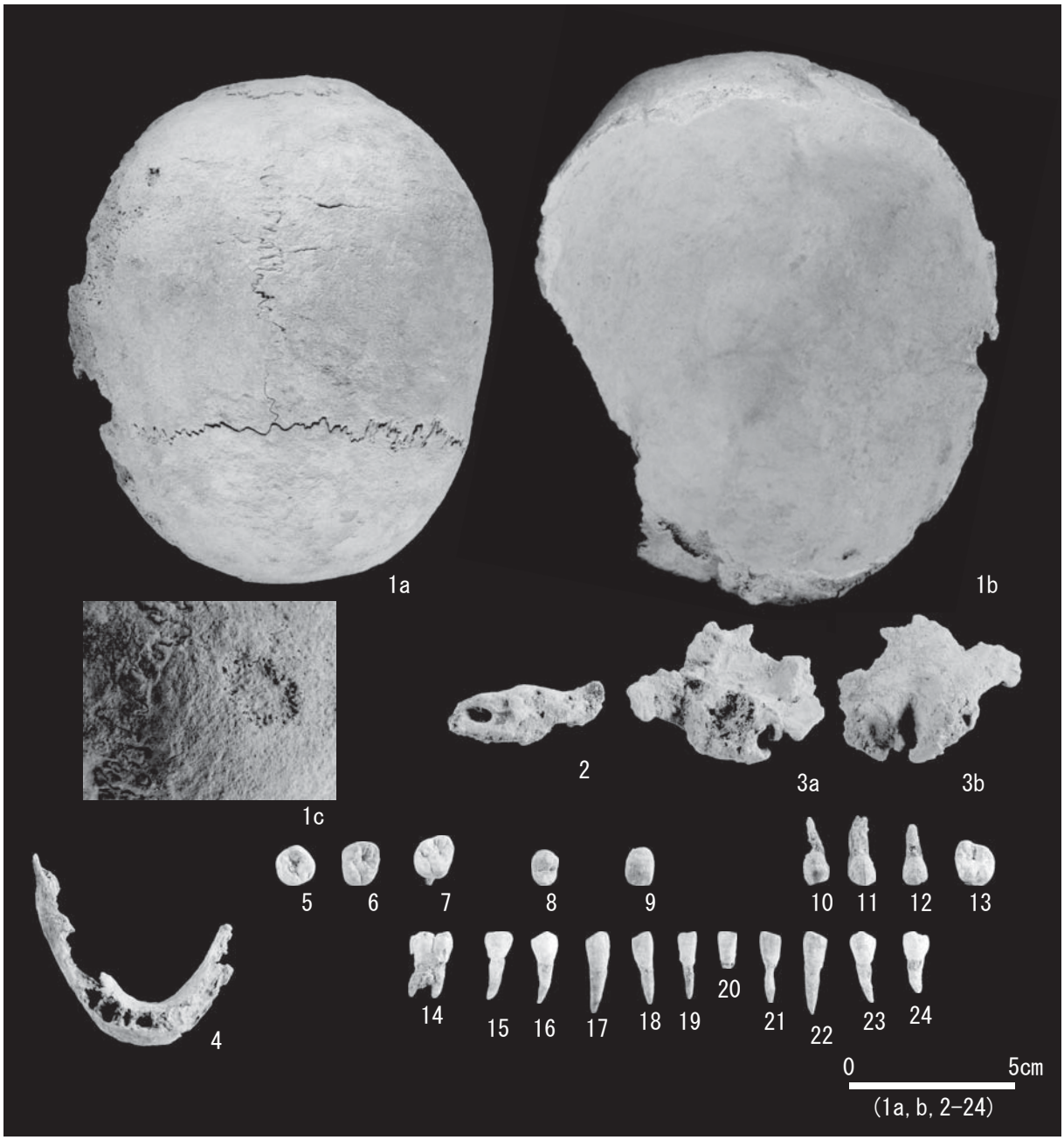


図 24　頭蓋各部位の名称と出土部位概念図

写真１　出土骨



1. ヒト脳頭蓋骨（SK-1；頭骨）　a：上面　b：内側　c：後頭骨にみられる炎症性の変化
2. ヒト右側頭骨錐体部（SK-1 南西 1/4 軸部分；骨①）
3. ヒト右側頭骨（SK-1；頭骨）
4. ヒト下顎骨（SK-1 南西 1/4 部分；アゴ）
5. ヒト右上顎第 3 大臼歯（SK-1 南西 1/4 平面？）
6. ヒト右上顎第 2 大臼歯（SK-1 南西 1/4 平面？）
7. ヒト右上顎第 1 大臼歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑤）
8. ヒト右上顎第 1 小臼歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑭）
9. ヒト右上顎第 2 切歯（SK-1 南西 1/4 部分南北軸拡張）
10. ヒト左上顎犬歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑧）
11. ヒト左上顎第 1 小臼歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑥b）
12. ヒト左上顎第 2 小臼歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑥a）
13. ヒト左上顎第 1 大臼歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑦）
14. ヒト右下顎第 1 大臼歯（SK-1 南西 1/4 部分；歯②）
15. ヒト右下顎第 2 小臼歯（SK-1 南西 1/4 部分；歯①）
16. ヒト右下顎第 1 小臼歯（SK-1 南西 1/4 部分；歯③）
17. ヒト右下顎犬歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯④）
18. ヒト右下顎第 2 切歯（SK-1 南西 1/4 部分）
19. ヒト右下顎第 1 切歯（SK-1 南西 1/4 部分南北軸拡張）
20. ヒト左下顎第 1 切歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑬）
21. ヒト左下顎第 2 切歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑫）
22. ヒト左下顎犬歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑪）
23. ヒト左下顎第 1 小臼歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑩）
24. ヒト左下顎第 2 小臼歯（SK-1 南西 1/4 軸部分；歯⑨）

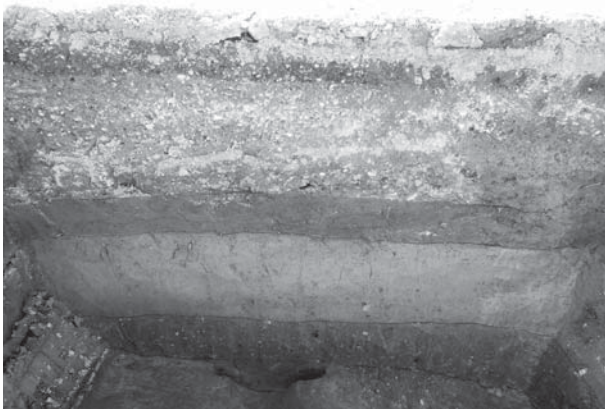
写　真　図　版

1．調査区南壁断面 (北から)

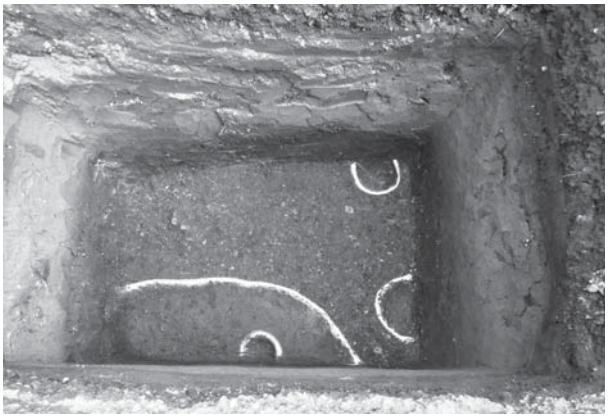
2．調査区全景 (西から)

1．調査地近景（南東から）

2．HKA15-6 機械掘削



3．HKA15-6 調査区西壁断面



4．HKA15-7 完掘状況（西から）

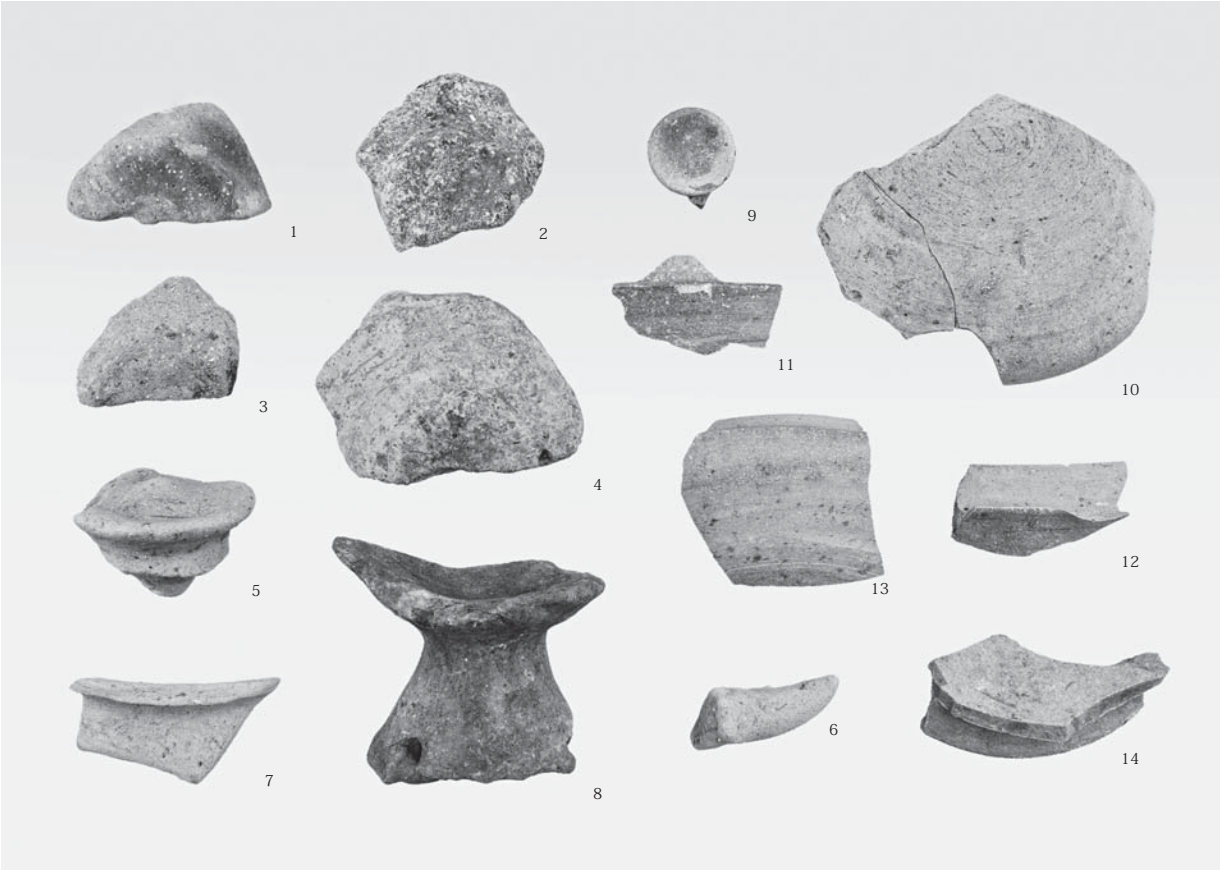
5．HKA15-8 調査区西壁断面

6．HKA15-8 完掘状況（東から）

7．HKA15-9 完掘状況（東から）

8．HKA15-10 完掘状況（西から）

1．SD1 出土遺物



2．HKA15-1、HKA15-2、HKA15-8　包含層出土遺物

図版4　耳原古墳

1．トレンチ１全景（南から）

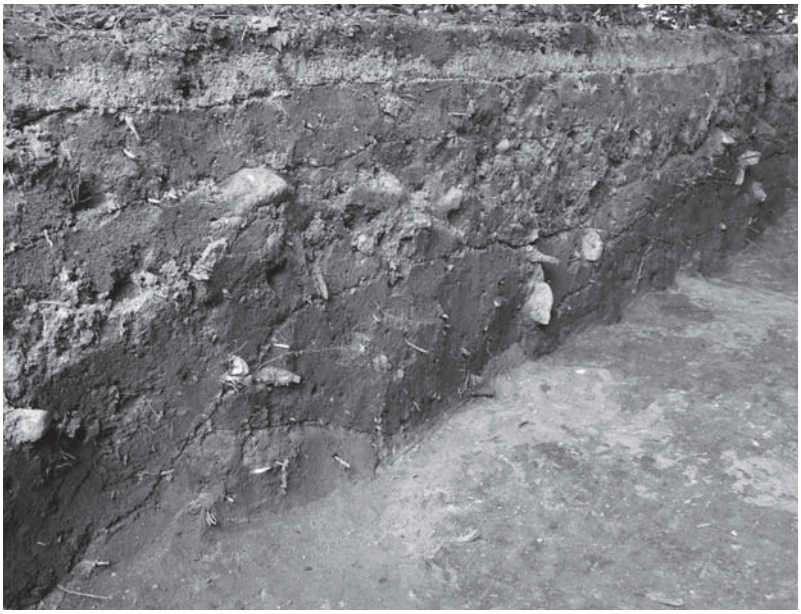
2．トレンチ１断面（南西から）

3．古墳羨道部断面（南西から）

4．トレンチ２全景（南西から）

5．トレンチ２断面（北東から）

6．トレンチ２断面（南から）



1．トレンチ２
墳丘盛土断面（南から）

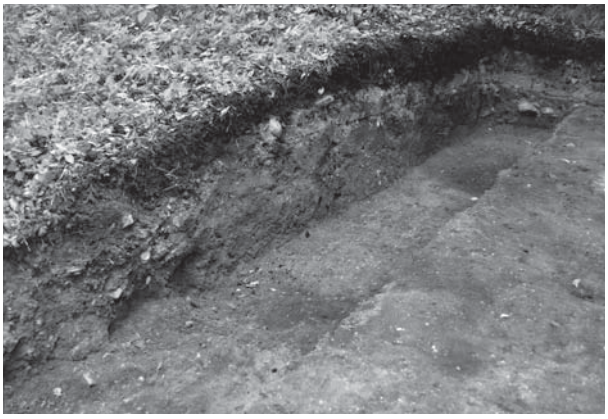
2．トレンチ２
墳丘盛土断面（西から）

3．トレンチ２
周溝断面（北東から）

図版6　耳原古墳

1．トレンチ３全景（西から）

2．トレンチ３墳丘側断面（南西から）

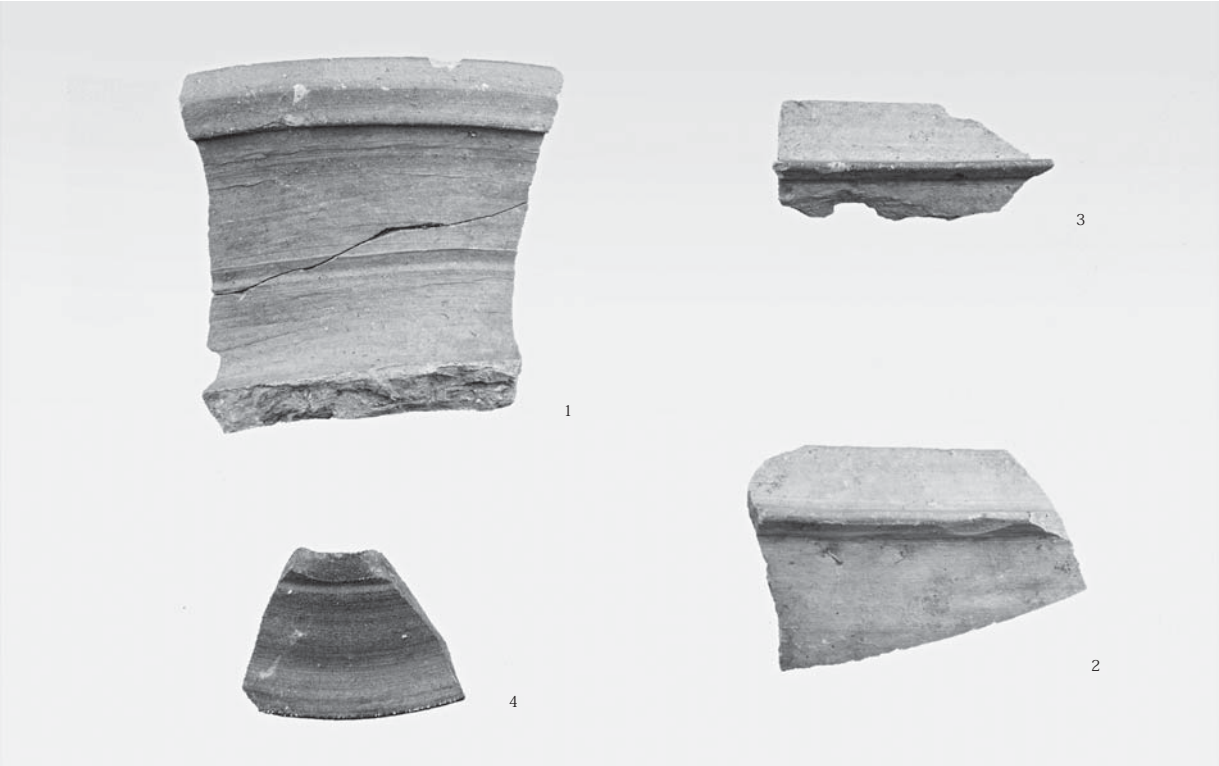


3．トレンチ３西側断面（南西から）

4．トレンチ４全景（南西から）

5．墳丘盛土断面（北から）

6．周溝断面（北から）

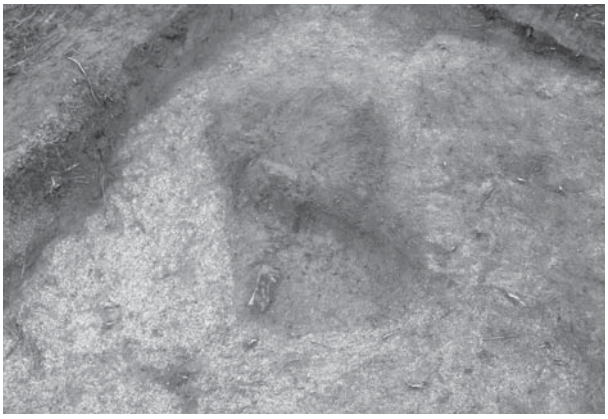


1．出土遺物（1）

2．出土遺物（2）

図版8　千提寺菱ヶ谷遺跡　土壙墓（1）

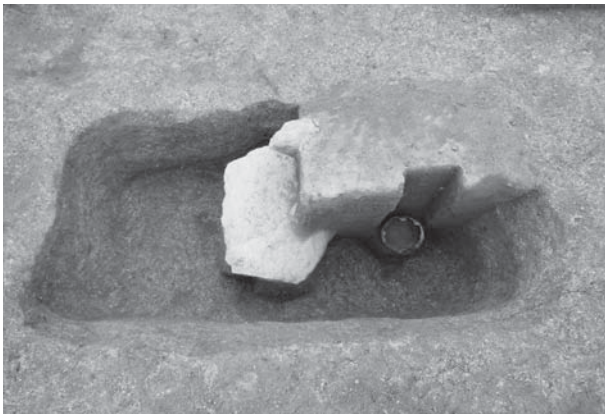
1．土壙墓から東方の竜王山を望む



2．土壙墓検出状況（東から）

3．セクション設定状況と石材出土状況（北から）

4．土壙墓に投入された矢穴痕をもつ割石（南から）



5．土壙墓分割掘削完了状況（北から）

１．縦断面西半部堆積状況

２．横断面北判部堆積状況

３．頭骨・下顎骨出土状況

４．頭骨検出状況

５．土壙墓出土矢穴痕をもつ割石

図版10　千提寺菱ヶ谷遺跡　大型土坑

1．最高所に立地する
大型土坑（西から）

2．大型土坑検出状況（西から）

3．土層断面（南壁）

4．土層断面（南東から）

5．底面検出状況（南から）

6．部分掘削完了状況（南から）

1．南尾根テラス面検出状況（南西から）

2．南尾根テラス面検出状況（南から）

3．南尾根南端部検出長方形土坑（南から）

4．範囲確認ルート１

5．範囲確認ルート２・３

6．範囲確認ルート４

7．現地見学会風景

8．発掘調査検討会風景

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうななねんどいばらきしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほうはち―こっこほじょじぎょうにともなうはっくつちょうさ―
書名	平成27年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報８―国庫補助事業に伴う発掘調査―
シリーズ名	茨木市文化財資料集
シリーズ番号	第66集
編著者	川村和子、坂田典彦、髙村勇士、富田卓見、正岡大実、水久保祥子
編集機関	茨木市教育委員会
所在地	〒567－8505　大阪府茨木市駅前三丁目８番13号
発行年月日	平成28年（2016）３月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
茨木遺跡［IBK15-1］	大手町	34°41′57″	135°34′21″	H27.4.15	7㎡	個人住宅建設工事
倍賀遺跡［HKA15-1］	畑田町	34°49′34″	135°33′53″	H27.8.3～6	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-2］	畑田町	34°49′34″	135°33′53″	H27.8.3～6	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-3］	畑田町	34°49′35″	135°33′53″	H27.8.3～6	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-4］	畑田町	34°49′35″	135°33′53″	H27.8.3～6	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-5］	畑田町	34°49′34″	135°33′53″	H27.8.24～27	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-6］	畑田町	34°49′35″	135°33′53″	H27.8.24～27	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-7］	畑田町	34°49′35″	135°33′53″	H27.10.23	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-8］	畑田町	34°49′35″	135°33′53″	H27.11.17	5㎡	
倍賀遺跡［HKA15-9］	畑田町	34°49′35″	135°33′53″	H27.11.19	6㎡	
倍賀遺跡［HKA15-10］	畑田町	34°49′34″	135°33′53″	H27.12.25	6㎡	
郡・倍賀遺跡［KOR・HKA15-2］	畑田町	34°49′33″	135°33′53″	H27.8.24～27	6㎡	
耳原古墳［MHK15-1］	耳原三丁目	34°50′31″	135°33′49″	H27.7.6～23	65㎡	範囲確認
千提寺菱ヶ谷遺跡［SDH15-1］	大字千提寺	34°53′04″	135°31′56″	H27.4.23～8.31	226㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	遺構	遺物	特記
茨木遺跡［IBK15-1］	集落跡	古　墳	土坑、溝	土師器、瓦、陶磁器	
倍賀遺跡［HKA15-1］	社寺跡	古　墳	柱穴、溝	土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-2］	社寺跡	古　墳	溝	土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-3］	社寺跡	古　墳	柱穴、土坑	土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-4］	社寺跡	古　墳	柱穴、土坑、溝	土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-5］	社寺跡	古　墳	柱穴、土坑、溝	土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-6］	社寺跡	古　墳	柱穴、溝	土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-7］	社寺跡	古　墳	柱穴、溝等	土師器、須恵器、瓦器	
倍賀遺跡［HKA15-8］	社寺跡	古　墳	溝	弥生土器、土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-9］	社寺跡	古　墳	土坑、溝	弥生土器、土師器、須恵器	
倍賀遺跡［HKA15-10］	社寺跡	古　墳	柱穴、土坑	土師器、須恵器	
郡・倍賀遺跡［KOR・HKA15-2］	集落跡・社寺跡	弥生・古墳	柱穴、溝	土師器、須恵器	
耳原古墳［MHK15-1］	円　墳	古墳後	墳丘、周溝	瓦、須恵器、土人形	府指定史跡
千提寺菱ヶ谷遺跡［SDH15-1］	その他の墓	中世・近世	土壙墓、土坑、溝、テラス造成	土師器、瓦器椀、花崗岩割石、人骨	

茨木市文化財資料集　第66集

平成 27 年度　茨木市埋蔵文化財発掘調査概報８

―国庫補助事業に伴う発掘調査―

発行日　平成 28 年 3 月 31 日

発　行　茨木市教育委員会

印　刷　株式会社トゥユー